
哀川くんのネギま！？戦記

駄猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀川くんのネギま！？戦記

【Zコード】

Z2033U

【作者名】

駄猫

【あらすじ】

哀川くんが死んだのは駄女神の因果操作の所為！？

まあそんなこんなあつてネギま！？の世界に哀川くん参上！－

パートナーは打ち止めじゃなくミサカさん！－

前回の教訓を忘れない内に投稿した駄猫の2・5作目－

今回も転生じゃなくヒトコシパーー？（前書き）

前作の哀川くんは皆わんを不快にわからてしましました。
申し訳ござりません。

前回の教訓を胸に新しい哀川くんのネギマーク戦記始まります

今日は転生じゃなくてトリップ！？

拓也視点

皆さんには天国って信じるかア？

因みに俺は絶賛天国中だぜエ・・・

女神

「あの・・・すみませんでした！-！」

拓也

「さつきからなンなンですかア？」

女神

「あのとき『ファイアンスマ』に倒される筈じや無かつたんですけどー！」

拓也

「あの右手ヤローか・・・」

女神

「本当に皆さんと帰られる筈だったんですねー！」

拓也

「ふウン・・・まあいいぜエ・・・

俺が逝くのは天国か地獄か幻想 か冥界か？

女神

「幻郷は東 じゃ無いですかー？」

拓也

「マジで何処逝くの俺はよオ・・・・・」

女神

「あの・・・この五枚カードの内の一枚のどれかの世界に逝つても
らいます」

拓也

「違う世界に逝くのはイインだがなア・・・・」

カードの中身はつと・・・

一枚目 銀色な魂の世界

二枚目 ポケットなモンスターの世界

三枚目 とある少女が電撃使つて頑張る世界

四枚目 正義の魔法使いがたむろする世界

五枚目 未知の機械で無限の宇宙の世界

・・・む・・・5枚目がいいなア・・・

女神

「シャッフルシャッフル」

拓也

「シャッフルシャッフル じゃねエよオ！！」

女神

「どれがイイですか？」

拓也

「ンじゃアこれで……」

・・・正義の魔法使いがたむろする世界・・・原作知らないんだが・

女神

此度は本当にすみませんでした。・・・

次の世界では頑張ってください!!

「まあ・・・適当に頑張つてくるわア・・・」

女神

「何か有ること前提なんだなア……」

女神

「では行っていらっしゃるところは

拓也

「おウ・・・・・行つてゐやう・・・・・」

キイイイイ・・・バタン

暗い・・・どつちに行けばいいんだア？駄女神よオ・・・
アフターケア位していつてくれねエかなア？
まア・・・取り敢えず歩くかア・・・

それにしても暗エ・・・某うるさい星の奴らの面堂せんなら」言
うだろオ・・・

『暗いよ狭いよ怖いよ』・・・と

ロッカーの仲では無エンだがなア・・・歩いてる氣がしねエ・・・

拓也
「暇だなア・・・」

ミサカ
「そうですね。ヒミツサカは素つ氣なく答えます」

拓也
「ン？・・・・・」

ミサカ
「どうしたのですか？ヒミツサカは頭がどこか可笑しくなったのか？
と心の中で笑いながら
訪ねます」

拓也

「えエヒ・・・何故テメエが此處に居るンだア?」

ミサカ

「私は貴方の案内を駄女神に押しつけられました。とミサカはメン
ドクセヒと思ひながら

答えます」

拓也

「テメエ何号だア?」

ミサカ

「私は駄女神によつて貴方の従者として生み出された・・・フム・・・

・番外号といつよつは特別号ですね。とミサカはうんざつしながら
答えます」

「コイツ・・・毒舌すきやしねヒか?

取り敢えず、コイツは一方通行アカセラレータに関係がねヒコトを知つたといつ
とで
良かつたとするかア

拓也

「ミサカ・・・で良いのかア?呼び名はよオ」

ミサカ

「ええ。ヒミサカは何を当たり前のコトを言つていいのかと心の中
で思いながら答えます」

拓也

「あのオ・・・俺の心がブローケンなンだがア・・・」

ミサカ

「そうですか。ヒサカは、でも良いので聞き流します」

泣いていいんだろうかア・・・

ミサカ
「取り敢えず道案内をします。とミサカは今から始まる旅にメンド
クセエとの感想を持ちながら
案内します。」

拓也 「・・・・・誰か・・・助けてくださいーー！」

「五月蠅いです。ヒリサカはいつをやつしながらシッ ハリサカ

拓也

ミサカ

「知るか。」

拓也

・・・・・リアルに泣いて良いのかなア・・・

ン? どんどん光りが近づいて来たなア . . .
新しい命つて言つけどよオ . . . この姿なり、トリシップじや無Hのかア?

ミサカ

「貴方の考えで合っていますよ。ヒミサカは地の文を読んで答えます」

拓也

「人の心を勝手に読むンじゃ無エ・・・」

ミサカ

「しようがないでしよう、貴方とはめんべくさい回線が繋がつて貴方の演算を助けているんですから。因みに貴方は今の所、某絶対可憐な子供達のレベル8を持つっています。学園都市のレベル6より強いですね。ヒミサカは面倒臭い説明を終わらせ一息つきます」

「ちょっと待て・・・絶対能力より高いって何だア・・・?
おイおイ・・・前より規格外になつてねエかア?」

ミサカ

「前と言つのが、あの途中でぐちやぐちやになつたアレを指すなら
そうですね。と

ミサカは前回の駄猫を批判しながら答えます

拓也

「メタな発現＆駄猫を傷つけるのは止めよつなア?」

ミサカ

「思つているコドが口に出てしまつので其れは無理ですね。ヒミサカは残念そうに

見えるよつに答えます

残念そうに見えるようにつて・・・
イコール全然残念じや無エンだなア・・・

拓也

「お、此処かア？」

ミサカ

「そうですね。ヒリサカは髪を弄くりながら答えます」

拓也

暇なンだな・・・」

ミサカ

11

ミサカ

拓也

「此のドアかア？」

「ええ。ヒミツサカは内心早く開けやがれと思ひながら答えます」

拓也

「そつかよオ・・・まア、取り敢えず」これからよろしく頼むぜH・・・
・ミサカ」

ミサカ

「仕方がないからよろしくしてあげます、拓也。ヒミツサカは若干照
れながら答えます」

照れ隠しつて「イツにも可愛いく」「あんだなア・・・

ミサカ

「私は貴方の心の中が読めるのですが・・・。ヒミツサカは呆れなが
ら場の空気を入れ換
えようとします」

拓也

「ククツ・・・そつだつたなア・・・じやあ開けるぞオ」

キイイイ・・・

ま、まぶしいイ！！

目がー目がアアアアー！！

ミサカ

「何を馬鹿な」とをやつて「るんですか？」とミサカ呆れながら訪ねます」

拓也

「スマン・・・現実逃避してたぜ」

・・・・・だつてさ・・・目を開けたら燃やされてる村だぜ？
あの駄女神バカ出すト「間違つたンじやア無バカだろうつなア・・・

ミサカ

「その可能性は大いにありますね。ヒミサカはあの駄女神バカを思い浮かべながら

相づちを打ちます」

拓也

「取り敢えず助けるかア」

ミサカ

「ええ。ヒミサカはやはり一方通行とは違つのだなと実感して驚きながら

も好感を持ちます」

拓也

「そら良かつたぜ」・・・・ンじやあ行くぞオーー！」

ミサカ

「はいーと!! サカは駆け出します」

ユウナ・スプリングフィールド視点

ネギ

「ピンチになつたらお父さんが助けてくれるんだ!!」

お前みたいに正義の魔法使いを肩つて呼ぶ奴になんか絶対に来ないんだ!!」

ユウナ

「ハイハイ・・・」

神よ・・・貴方は何故私をこんな所に産んだんだ・・・
生まれてくるとしても一般人が良かつた・・・
畜生なんでこんな危機トラブルメイカ旗乱立機の所に・・・
どうせなら拓也と同じ場所がよかつた・・・

ネギ

この・・・落ちこぼれ！

・
・
・
・ウゼ
H

「...! 一オナリ」

四六九

ハニカムの悲鳴は

卷二

「…」

ユウガ

タツタツタツタ

なんか逃げるな！とか言つてるな・・・しらねえけど

今私は燃えた村にいる・・・

因みに私は前世の記憶がある

たコトは

普通妹に「落ちこぼれ！！」って呼ぶか？

如きはそんなこと言はるには思ってくれるけれども

村で一人でも多く助けようとしているんだけど・・・

つ
て

言つて聞いてくれないんだよな・・・魔法にそんなに価値が有るのか分からない

使えないだけで面汚しだぜ？泣けてくるわ・・・

しかも、悪魔襲撃の理由が野菜は関係ないよう」「災厄の魔女の娘の所為で！！」・・・

それ言つたらアソシも息子だろ・・・

ユウナ

「それでも・・・それでもみんなを助けたいって思った私つて偽善者だよな・・・」「

「生きてる奴はいるかア！-！」

・・・今の声つて！-！

拓也視点

拓也

「うわ・・・酷工なみんな石つてよオ・・・取り敢えず生きてる奴探すかア！」

ミサカ

「その方が合理的ですね。とミサカはこの状況をどうにかする方法を考えながら

その案に乗ります」

拓也

「生きてる奴はいるかア！-！」

？

「えー？ 拓也！？ なんで生きてるんだー！？」

拓也

「・・・もしかして・・・」

ミサカ

「上条優奈さんです。ヒミサカは駄女神の報告を受けて答えます」

拓也

「マジかよ・・・取り敢えず一人でも助けるぞーー！」

ユウナ

「今はユウナ・スプリングフィールドだ！あの雷は私の親父の魔法だ！」

あそこに元凶がいる！其奴を倒せば石化が止まるー！」

拓也

「ユウナーお前も来るかアーー？」

ミサカ

「おいていくより安全なので連れて行った方が良いです。ヒミサカは生存確率を計算しながら答えます」

ユウナ

「其所のお姉さんが誰かは気になるが分かったー！」

拓也

「行くぞーー！」

ナギ視点

ナギ

「オラアアア！！！来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹けよ南洋の嵐。
「雷の暴風」！！」

悪魔共

「ギャアアーー！ケイヤクガチガウゾーー！」

ナギ

「・・・フウ・・・・」(辺にはもうこないか・・・)

ユウナ？

「このクソ親父イーー！もつと卑くに来やがれーー！」

？

「お前・・・親に言つ態度じゃねHぞ・・・」

ナギ

「お前・・・ユウナかー？」

ユウナ

「ああー来るならもつと早く来てくれ・・・」

ナギ

「そつちのは誰なんだ?」

拓也

「其奴の連れの哀川拓也・・・ンで、こいつが」

ミサカ

「私の名前はミサカです。ヒミサカは赤毛のヒトに自己紹介します」

ナギ

「俺の名前はナギだ・・・すまなかつた・・・ユウナ
一緒にいてやれなくて・・・」

ユウナ

「つと、それは野菜^{ネギ}に言つてくれ・・・取り敢えずアイツら悪魔の
この村を潰すつていうふざけた幻想をブチ殺しにいくぞーーー」

今日は転生じゃなくてトリッパー？（後書き）

“ひつじたでしょ”つか？

拓也

「今日は頑張るんだろ？」

もうひん…あんな「トに成らな」よつて今回せ//やかせんとコウナ
さん
以外出す気は無い！

拓也

「ならいいじゃね」か・・・
まあこんな駄目駄目な作者だが、よろしくしてやつてくれ」

では次回もよろしくおねがいします！
ではB i s b a l d !

欠陥? そんなモノないですよ? と// サカは自分がレベル5なのを少し自慢します

台本書きなのが気に入らないヒトは今すぐ戻つてください!
何度も言われても変えられないで・・・
主に力量不足で・・・
途中で誰が誰なのが分からなくなりますw
では今回も哀川くんのネギま!? 戦記始まります
・・・また不合格だつたぜ・・・

欠陥? そんなモノないですよ? ミサカは自分がレベル5なのを少し自慢します

拓也視点

ユウナ

「つと、それは野菜^{ネギ}に言ってくれ・・・取り敢えずアイツら悪魔のこの村を潰すつていうふざけた幻想をブチ殺しにいくぞ!」

ミサカ

「では、一番槍いきますね。ヒミサカは超電磁砲^{レールガン}の準備をしながら宣言します」

拓也

「・・・マジかよ・・・『イツ・・・御坂美琴の技使えンのかよ・・・
良い方の誤算だぜ』・・・クックック・・・やつてやれミサカア」
マジで誤算だつたなア・・・コイツレベル5とかよオ・・・
あの駄女神・・・中々気が利くじやねエか!

ナギ

「えと・・・超電磁砲だつたか?
其れつて強ええのか?」

ユウナ

「あ、ああ・・・ミサカが使えるとは想わなかつたケドな・・・
確か、軍隊一つ潰せる位だな・・・」

ナギ

「洒落にならなく無えか？」

ユウナ

「因みに拓也は世界一つ相手に出来る位だな・・・」

ナギ

「ぐうう！戦いてえ！――」

俺は戦いたく無いですわア・・・英雄相手はキツイしなア

ミサカ

「行きます！」

キュイイン・・・ドン！バシュウウウ

拓也

「・・・消えたなア・・・悪魔共・・・」

ユウナ

「・・・・・わあお」

ナギ

「俺の魔法より強い！？」

・・・駄女神エ

・・・どうじうことなんですかイ

「レガアイツみみたいなバトルマニアだと叫つ」と想像すると「えぞオ・・・

ミサカ

「次行きましょうか。ヒミサカは快感を感じながら促します」

拓也

「・・・あア、そうだなア・・・」

ユウナ

「・・・い、行くぞ!」

ナギ

「お、おひー!」

拓也

「何か赤髪のチビが泣き喚いてンだが・・・」

ユウナ

「あ、野菜だ・・・」

「野菜だ・・・」

ミサカ

「野菜 ネギ ．．．とは？」

ユウナ

「私の愚兄だな．．．文字通り」

．．．コイツに此処まで言わせるつてすげエなア．．．おイ
コイツ余り好き嫌いしなかつた筈なんだがなア．．．

ナギ

「お前．．．ネギか？」

ネギ

「おとうさん！？」

ナギ

「大きくなつたなネギ．．．」

余り俺には関係ないので飛ばすぜエ！？

ネギ

「おとひせん…おとひせん…」

あ、飛ばしすぎた…
まあいいか…

拓也

「おい！餓鬼！」

ネギ

「ひつ…！」

拓也

「テメエ達の中で生き残りはいんのかア？」

ミサカ

「…此の男の子を除いて二人ですね。ヒミツサカはサーチ結果を報告します」

ユウナ

「なあ…私の右手で直せないのかな…」

拓也

「試してみる価値はあると想つぜH」

ミサカ

「成功確率は五分五分ですが・・・貴方なら出来ると想いますよ。ヒサカは自分らしくもなく掛けてみたいと想います」

拓也

「マジでお前らしく無Hな・・・」

ユウナ

「やつてみるーー。」

因みに野菜は氣絶したままです

ユウナ

「・・・・・ 行くぞ・・・」

フウウ・・・

ユウナ

「私は此処では落ちこぼれと呼ばれた・・・苛められもした・・・
でも私はアンタ達を助けたいんだ!!
だから・・・だから・・・
私がアンタ達のその悪夢からすくい上げてやる!
テメエ達のその幻想を^{のろい}ブチ殺す!!」

ピキィイイイ

村人A

「・・・ここは!?」

村人B

「助かったのか!?」

村人C

「え?・・・君が助けてくれたのか?」

チンピラA

「落ちこぼれにd「ギャンギャン、ギャンギャンウゼンだよ・・・
「ツガ」

拓也

「テメエ達を助けたのはな・・・其所にいるユウナ・スプリングフィールドなんだよオ・・・・」

ミサカ

「此のチンピラ・・・どうしますか?とミサカは顔を踏みながら訪ねます」

拓也

「捨てとけ」

ユウナ

「助けられてよかつた・・・

私はもう後悔したくなかったからな・・・」

村人C

「君がたすけてくれたのか・・・有り難う・・・

そして、今まで済まなかつた・・・魔法というモノをしだけで計つていた

本当にすまなかつた

ユウナ

「い、いや、私は好きに助けただけだから・・・・・

拓也

「礼ぐらいもらつとけ」

やつぱイイ奴だよなア・・・悪く言つと甘過ぎだがなア・・・
俺みたいな悪党がいた方が・・・

ミサカ

「貴方は悪党なんかじゃないですよ・・・。ヒミツカは心からの言葉を述べます」

拓也

「ハア・・・お前もお前で・・・ま、サンキューな」

ユウナ

「そういうや、何処も気持ち悪いト「無えか?」

村人D

「ハイ!」

ユウナ

「ん・・・なら良かつた・・・」

野菜ログインしました

ネギ

「あー落ちこぼれー!」

拓也

「(切れていいのかなア)・・・」

欠陥? そんなモノないですよ~♪と//サカは自分がレベル5なのを少し自慢します

真・恋姫蜀編クリアしましたw
最後微妙に感動したな~・・・

拓也

「そりこやセア、今田テストだつたンだろ?」

・・・なんのこどせうか?

拓也

「・・・まあ イイ、 良く無エがまア 良い・・・
恋姫始めるとかいわねエよなア?」

ギクッ!?

では次回!

拓也

「逃げたな!~?」

ではB i s b a l d!

切れないですよ・・・哀川くん（前書き）

今回は哀川くんの設定を書きます次回はコウナさんです
では今回も哀川くんのネギま！？戦記始まります

切れないですよ・・・哀川くん

拓也 視点

野菜ログインしました

ネギ

「あー落ちこぼれーー！」

拓也

「（切れていいいのかなア）・・・」

ユウナ

「切れるのだけは止めてくれ・・・村に被害が出ちまつ」

ミサカ

「被害の大きさは超電磁砲レールガンの数倍になりますね。ヒミツサカは洒落にならないので

本気で止めていただくことを推奨します」

・・・俺暴れてもそんなに被害出無エだろオ・・・
ン？・・・までよ・・・俺そつこやレベルがやばいコトになつてい
たような・・・

今度無人島で本気を

ミサカ

「出さないでください。ヒミツサカは自然保護を促します」

ネギ

「みんな無事なんだ」「……で、なんで落ちこぼれがいるの?」

ブチツ

村人C

「ユウナちゃんが助けてくれたんだよ……

命の恩人を落ちこぼれっていうのは僕は許さないよ……」

村人D

「皆、魔法が全てだと想っていたわ……でも其れより魔法より大切なモノがあつたこと

を石化している中にユウナちゃんに教えて貰つたの……」

「H・・・魔法の村にもこんな奴達がいんだなア……
ちつと驚きだなア……正義語つてる唯のバカ共かとばつか想つて
たぜエ

ミサカ

「……それは間違いじゃ無いですよ。とミサカは気をつけようつ
に促します」

「……なんかな嫌な感じがするんだが……

ユウナ

「なんか嫌な感じがするんだが……」

「バキイイ!!」

MMの魔法使い視点

MMの魔法使い

「つち、使えない悪魔共め・・・・・！」

殺つてやりましょう・・・・・

氷の精霊17頭。集い来たりて敵を切り裂け。「魔法の射手・連
弾・氷の17矢」

バキイイ！！

MMの魔法使い

「つち外れたか・・・・ならーー！」

拓也

「なら・・・・なんだア？」

MMの魔法使い

「！？・・・なぜ此処にいる！？」

拓也

「バカめ・・・・狙いを絞つて一発で仕留めなきやなア・・・
こうやって居場所がばれるンだよオ」

MMの魔法使い

「グハ！ち、畜生！
バケモノめ！！」

拓也

「はア？バケモノ？上等だぜエ・・・・まあ、俺から見たら、テメエ
達魔法使いの方が
バケモノだがなア・・・・・」

ミサカ

「欠陥電気」

「ミサカは多種多様の技を使える」とを意味しながら

バカを氣絶させます」

拓也

「折角俺が血液逆流させちゃうと想つたのによオ」

ユウナ

「・・・それだけは止めてくれ」

「ち・・・折角実験が出来そうだったのによオ・・・
惜しかつたぜ」

ユウナ

「決して惜しく無かつたぞ・・・」

拓也

「あ、そうだ・・・俺がなンで生きてンのか言つてなかつたよなア

？」

ミサカ

「其れは私の出番なので私が説明をせいでいただきます。とミサカは
拓也の面倒事を受けるのが
仕事なコトを主張します」

ユウナ

「お前・・・妹達だつたんだな・・・」

ミサカ

「いいえ、私は駄女神によつて拓也の従者として生み出された特別

号ですね。と

ミサカは答えます

ユウナ

「駄女神？」

拓也

「俺を殺した張本人だぞ」

ユウナ

「殺したのはフィアンスマじゃないのか！？」

ミサカ

「フィアンスマではあるんですが、本当は拓也は皆さんと帰れる筈だったんです。だから駄女神の所為だと言っているのです。とミサカは説明します」

ユウナ

「・・・取り敢えず駄女神とやらが因果を変えてしまって、拓也が死んだ・・・

コレでOKか？」

ミサカ

「ええ。とミサカは思考の早さに驚きます」

拓也

「コイツ頭はいいンだぜエ」

マジで頭は・・・なア・・・

コイツの性格は恋姫で言つ、劉備

頭脳は同じく恋姫で言う、曹操って感じだなア・・・
知らない方はGoo goo eで、「恋姫 w i k i」で調べてくれエ
・・・なンで今俺は言つたンだア? こんなコト・・・

ユウナ

「頭だけはつて・・・失礼だぞ? 私に

拓也

「知るかよオ・・・」

「氏名」 哀川 拓也

「性別 身長」 男性 168cm

「属性」 善・悪・狂

「能力」 筋力:C 耐久:C

敏捷:C 魔力:X

幸運:A 宝具:EX(?)

「スキル」言靈・A 前兆の感知・A 直感・A カリスマ・A
反射・EX

「宝具」一方通行・EX
レベル6を越えている為、どんな能力や魔術でもベクトル変換できる。

「性格」戦闘中に感情が昂ると凶暴な言動や残虐な戦い方をしたり、敵を痛めつける際に快樂を感じる

ような危うい面も見せる。表情も淡々とした無愛想な物やしかめつ面が多い。元はごく普通の少年だつたが、夢で異世界の自分をみてしまい、他者へ感情を向ける事に非常に消極的になり、常に周りを拒絶する無関心で傍若無人な性格となるが、上条優奈めと出会つてからは、彼女を守るために行動しながら、徐々に他人への思いやりを示すようになつていいく。今はツツコミ役など明るくなつてている。

「容姿」一方通行

切れないですよ・・・哀川くん（後書き）

フハハ w 合格できた！！

拓也

「よかつたなア・・・苦手な英語だつたンだろオ？」

うい w

よかつたお w w

では次回もよろしくおねがいします！ Bis bald！

かなり時間が飛ぶよ哀川くん（前書き）

今回、原作の直前まで飛ぶのですよ
所謂キンクリなのです
しゃべり方を変えたのはべ、別にひぐらしをやり直したからではな
いのです！
だらだらしてたら話が進まないので今回の処置なのですよ
では今回も哀川くんのネギま！？戦記始まるのですよ　いやー

かなり時間が飛ぶよ哀川くん

拓也視点

どうも哀川だぜエ・・・
今日は駄猫の力不足の所為で・・・キンクリするよウだ・・・
あきれたモンだぞオ・・・
つウ訳で・・・

『キング・クリムゾン』の能力の中では、この世の時間は消し飛び

・・・
そして全ての人間は、この時間の中で動いた足跡を覚えていねエッ！
『空の雲は、ちぎれ飛んだ事に気づかず！』・・・
『消えた炎は、消えた瞬間を炎自身さえ認識しない！』
『結果』だけだア！！この世には『結果』だけが残るンだア！！

魔帆良なつ

ユウナ

「ついたみたいだな」

拓也

「そうだなア・・・」

この異常につっこんでいいのかア？

異常と書いてアブノーマルとは読ま無工ぜ・・・めだかの箱じゃ無いからなア・・・

久々によもうかねエ・・・ジヤン・・・

とLOVE ダーク ス・・・借りて読ンだが・・・アレは良いものだア・・・

ミサカ

「・・・このクソムシが・・・・とミサカは侮蔑の眼差しを向けます」

ユウナ

「この変態が！－アンコミテッヂ・変態・ワーカスめ！－！」

拓也

「変態！？・・・まあ否定はせんよ・・・其れが俺だア－－！」

ユウナ

「そのふざけた妄想ブチ殺す！－！」

バキ！－

ミサカ

「雷符「欠陥電氣」－－！」

ビコビコビコ

拓也

「なンで・・・・・東方なンですかア?・・・・・」

バタン

ユウナ視点

拓也がバカなので、ここから先は私ことユウナ・スプリングフィールドの出番だ!

因みに拓也はミサ力に背負われてるけど・・・いいな・・・私がもうちつとでかければな・・・と言つても、10歳にして160cmあつたら流石に引くよな・・・

ミサカ

「Jのヒト・・・寝ていたり可愛いですね。とミサカは心に萌えを感じます」

ユウナ

「む?寝ていなくていいだよ?拓也はなあ・・・

長いので飛ばします 〃〃

44

・・・そう想わないか?」

ミサカ

「そう言えば、Jの人自分のヒトを悪やうにやうじてこむのです

が・・・

一体何故なのですか?とミサカは自然に出てきた疑問をいいます「

ユウナ

「・・・その話は長くなるんだが・・・

最初はただの普通の少年だったんだ・・・

まあ、人間は自分と違うのを嫌うんだが・・・アイツはどんどん仲間の輪に入つていったんだが

ある日夢で異世界の自分をみてしまい、他者へ感情を向ける事に非常に消極的になり、常に周りを拒絶する無関心で傍若無人な性格となつたんだ……。多分異世界の夢の時に10000もの妹達を自分の為だけに殺してしまつたからだろうな……」

ミサカ

「……そう……ですか……。ヒミツサカはあのときに少しほつとしていた理由が分かつたのにもやもやした気持ちをもちます」

拓也

「おイイ……コウナクウウウン……誰が話してイイと許可わしだア？」

ユウナ

「知つて貰わなきや駄目だろ……従者なんだしな?コウナさんはそう想うんだが……」

拓也視点

目が覚めたので俺視点に戻るぜエ・・・
不満かア?
・・・いや・・・リアルに不満つて言われたら立ち直れないから止
めてくれ・・・
さてと・・・

拓也

「俺が悪党つて言つてんのは・・・所謂ケジメであり、又鎮だなア・
・・自分の中にいる
クロイケモノをつなぎ止めるためのな・・・」

ミサカ

「クロイケモノ・・・ですか?」ミサカは疑問におもいます・・・

拓也

「クロイケモノ・・・簡単に言えば狂氣だなア・・・
例えば・・・だ、100人居るとする倒したい奴は1人な訳だア・
・・
ソイツが許せない奴だ・・・とすると俺は周りを巻き込む確率が
なア・・・

黒い翼状態と言えばわかるかア？」

ミサカ

「歯止めがきかなくなるのですね。ヒリサカは返答します

コウナ

「あのときはそんなこと無かつたよな・・・

ああ、あのときって言つのは、私が誘拐されたときな

拓也

「いや、俺は片方は四肢潰したし・・・もう片方は四肢を切り取つたからなア・・・

しかも血液逆流もしたしなア・・・」

ミサカ

「やうやう学園長室のようですよ。ヒリサカは報告します

ふむ・・・ 今日コウナくんが来る予定じゃったのう
護衛は一人つけるといつて居たが・・・ 何故声が震えていたのじや
ろうか・・・

後ろでは子供が「落ちこぼれのクセに」と呟んでおったのう・・・
あの子供がネギくんじゃろうか・・・

しかし・・・ 魔法がつかえないとは・・・

向こうの世界では「幻想殺し」「黒い死神の主」という二つ名がつ
くへりいじやから

それなりに腕はあるのじやうつ・・・ 心配じやのう・・・

えエと今ガングロサングラスがいるんだが・・・
コイツ、ユウナのこと嘲笑してやがったから・・・ついつい手がす
べつちまつてよオ・・・

ガングロ

「貴様！何をしたのかわかつてているのか！？」

うざい予感がア・・・

· · · to be continued

かなり時間が飛ぶよ哀川くん（後書き）

駄猫いくのです！！

咲夜

「今回からコツチも担当することになったのかしら？」

「え、違うのです・・・ちつとしたCMなのですよ
哀川くんの桜才戦記のですが

咲夜
「・・・」

黙り決め込まないでくださいです！！

「あ・・・取り敢えず名前出せたから良いのです・・・
良くは無いのですが・・・」

咲夜

「あ・・・」んなコトなら付き合わなければよかったです・・・

うう・・・

オリハルコンのハートに傷がついたのです・・・

咲夜

「・・・次回「うざい予感は大抵あたる」ようしくお願ひするわ
ではBiss baid」

ついでに予感は大抵あたる（前書き）

今日はフルボッコするのです
とにかくフルボッコするのです・・・
自重はしないのです！（胸を張つてキッパリ）

つざい予感は大抵あたる

えエと・・・前回が中途半端におわっちまつたので、前回のラスト
からだつてよオ

拓也視点

えエと今ガングロサングラスがいるんだが・・・
コイツ、ユウナのこと嘲笑してやがったから・・・ついつい手がす
べっちまつてよオ・・・

ガングロ

「貴様！――何をしたのかわかっているのか！？」

うざい予感がア・・・

ガングロ

「我々は正義の魔法使いなのだ！――貴様は我々をてく」

拓也

「てけどオに右フック」

ガングロ

「グボラ！・・・貴様！？・・・行くぞ！！」

正義の魔法使いA

バカ

「光の精靈11柱。集い来たりて「敵を射て。」「魔法の射手・連
弾・光の11矢」！」

拓也

「ウゼニ」

正義の魔法使いA

「なん……だと！？」

バタン・・・

正義の魔法使いB

「なら！風の精靈11人。縛鎖となつて敵を捕らえろ。「魔法の射
手・戒めの風矢」！」

はア・・・コイツ達ウゼニ・・・
どうしようかなア・・・

・・・ポクポクポク・・・チーン
よし！ミサカに任せて帰つて寝よウ

ミサカ

「嫌です。ヒミサカは拓也を盾にしながら拒否します」

ユウナ

「コイツ達運動神経無えのかなあ？さつきから肉弾戦がほとんど無
い」

拓也

「戦うのはいいんだがよオ・・・別に・・・

「命さえ残せばいいんだろオ？」

最近ミサカの毒舌でストレスたまつてつからなア

一イイ

未だマシな正義の魔法使い視点
未だマシな正義の魔法使い視点

なんだ！？今の笑みは！？

「闇の福音」なんかより・・・

この寒氣は・・・本能が逃げると云つて云つだ・・・

拓也視点

おつ俺視点に戻つたよオだなア・・・
読者かみは言つていた・・・やる事は簡単「ずたずたに」と
なら方針は一つだア・・・

拓也

「テメエ達全員悪リイガ・・・半殺しまでこつから先は一方通行だ
侵入は禁止つてなア！！オラアアアア！！」

バキッ！・・・ズドオオオン

正義バカの魔法使いC

「ヒイイ！？こんなバケモノに勝てるはずがない！！」

ガングロ

「なつ！？逃げるンじゃな・・・」

拓也

「なンだ？なンだよ？なンですかア？雑魚エ雑魚エ雑魚エよオ！…」

ズザザザザ

ユウナ

「拓也をバカにするとはな…万死に値する」

ミサカ

「アレでも相棒なんで…バカにしてんじゃ無Hよ力ス。とミサカはウゼエバカを蹴飛ばします」

まるで地獄絵図じゃンW
やベH…理性に歯止めがきかなくなつてきたぜH…
なンか制限つけるかア

拓也

「うつはア！綺麗にキャラ崩れじや無Hかア！
でもよオ…久しぶりの戦いがこんなンじや面白く無Hなア…
・
つウ訳でエレベル5までダウンつてなア！」

え？未だオーバーキル？ここからは知ら無Hし関係無H…
ずつたずたにしてやンよオ…！

拓也

「行くぜH…愉快に素敵にビビりさせてやるよ…」

ガングロ視点

私の名前はガングロではない！！

拓也

「行くぜ～・・・愉快に素敵にビビらせてやるよ～」

この言葉でまた一人逃げていった・・・

ガングロ

「貴様ア！！！」

学園長

「待つんじゃ！！ガンドルフィー二くん！！」

拓也視点

なンかぬらりひょんがきたンだが・・・

ぬらりひょん

「待つんじゃ！…ガンドルフィーーーくんーー！」

「…あのガングロ…ガンドルフィーーーって名なのかア…
憶えておいて損しか無エがなア…

しつかしあのぬらりひょん…多分強いなア…

ガングロ

「しかし！？あ奴達は我々に攻撃をしかけてきたのですよーー？」

ぬらりひょん

「すまないが…君たちの名を聞きたい…教えてくれないか
の？」

ユウナ

「私の名前は知つてんだろ？」

ぬらりひょん

「ああ…」

「ああ…」

拓也

「・・・俺の名前は アクセラレータ 一方通行だア」

ミサカ

「私は レイディオ・ノイズ 欠陥電氣です。とみンン レイディオ・ノイズ 欠陥電氣は答えます」

ユウナ

「・・・（おいおい・・・）なあ・・・私たちは一応客人として来てるんだろ?」

ぬらりひょん

「・・・そうじやの・・・」

アーツわざわざ客人を強調したなア
よくもまあ・・・俺らに読心術使ってくれてやがンなア?
取り敢えず全員の分を反射してガングロに返した

拓也

「なら、コイツの嘲笑はなんだつたんだろうな?えエ!?
テメエ達ふざけてんのか?あア!?私たちは其所の奴に呼ばれて
来てなんで不快にされたア?」

くさつてンのかア?いや、くさつてンだなア何?俺たち何か間違
つたことしたかア?俺たちは わざわざイギリスから来てン
だゼエ?」

其奴らが俺の連れ睨み付けて嘲笑・・・バカなンですかア?」

・この挑発に乗つて魔法一発撃ち込んでくれたら計画通りなんだが・・・

ガングロ

「貴様ア…言わせておけば…!？」

ぬらりひょん

「やめんか」

ガングロ

「風の精靈17人。集い来たりて…」「魔法の射手・連弾・雷の17矢」

おつ「コレで俺らの大儀名ぶ…

拓也

「チツ！避ける…ゴウナア…！」

ゴウナ

「うおおおおーー！」

ピキィイイイイン…

あ…・…そういうや「ゴイツ幻想殺しついてたンだ…

ハズイハズ過ぎるウ…！

そんなコト言つてる場合じや無エなア…

拓也

「オーケエ…・…要するに歓迎する氣は無いとオ…
よオし…・…帰エるぞオ」

ミサカ

「はい。ヒリサカはもう名前を隠す必要が無いので名前を出して返

事します

ユウナ

「分かつた・・・んじゅ 帰るか」

ぬらりひょん

「馬鹿者！――！」

済みませぬのじゅ・・・」

拓也

「もオいいわア・・・正義の魔法使いにはほとほと味れた・・・
魔法が使えなかつたら「落ち」ぼれ」強すぎたら「悪」なアにが
立派な魔法使いだア？」

でも、組織の上に立つモンが土下座したンだからしじうが無H・・

一応居てやンよ・・・でもなア・・・次なンらかの接触を図つて
きたらテメH達全員

「ぶつ殺すから」

? 視点
「面白いのが来たな・・・しかも片方はアイツの娘と来た・・・
楽しみだ・・・」

天井亜雄

「…ハツ、それは何をしているつもりなのだ？今更、お前のような者が」

「……、分かつてンだよ。こんな人間のクズが、今更誰かを助けようなどて思うのは馬鹿馬鹿しい
つてコトぐらいよオ。まつたく甘すぎだよな、自分でも虫唾が走る」

大体をもつて、この世界の住人はどいつもこいつも救いようがない、甘いだけで優しくない芳川桔梗、誰かを守ろうとした男に一瞬のためらいもなく鉛弾をぶち込んだ天井亜雄、そして一万人もの人間を殺しておきながら今更人の命は大切なんですとか言い出す一方通行。

こんな腐った世界の人間が、今更人に救いを求めるなんて、間違っている。人に救いを「えようと思つなんて、馬鹿馬鹿しいにもほどがある。

そんなことぐらい分かつてている。

こんな世界の住人だからこそ、痛いほどによく分かつている。

「けどよオ・・・・・このガキは、関係ねエだらたとえ、俺達がど
ンなに腐つていてもよオ。誰かを 助けようと言い出すことすら
馬鹿馬鹿しく思われるほどの、どうしよオもねエ人間のクズだつた
と してもさアこのガキが、見殺しにされて良いつて理由にはな
ンねエだらうが。俺達がクズだつて事 が、このガキが抱えてる
モンを踏みにじつても良い理由になるはずがねエだらうが！」

何となく分かつた。『実験』を止める為に操車場にやつてきた、あの無能力者レベル〇の気持ちを。一笑に帰すほどの甘つたれな考
えで命を賭けるにしてはあまりにもくだらない、妹達を助けると言
う 理由だけで立ち上がってきたあの男。

生まれたときから住んでいる世界が違うヒーローのように見えたが、
違つた

この世界に主人公なんていない。都合の良いヒーローなんて現れない。黙つていたつて助けは来ないし、叫んだ所で救いが来るとも限
らない。

それでも大切のものを失いたくなければ。散々待つていたのに助け
がやつてこなかつたからと、くだらぬ理由で失いたくなければ、
なるしかないのだ。

無駄でも無理でも、分不相応でも。

自分のこの手で、大切なものを守り抜くような存在に。

主人公のような、行いを

「確かに俺は一万人もの妹達をぶつ殺した。だからつてな、残り一
万人を見殺しにして良いはずがね エンだ。ああ奇麗事だつての
は分かつて、今更どの口がそんな事言うんだつてのは自分でも分
か つてる！でも違うんだよたとえ俺達がどれほどのクズでも、
どんな理由を並べても、それでこのガキ が殺されて良い事にな
ンかならねエだらオがよー！」

・・・実驗場・・・

上条当麻

「歯を食いしばれよ、最強をこじやく

「

俺の最弱をこじよつは、ちつとばっか響くぞ

「

拓也

「つは！？・・・久々に見たなア・・・この夢・・・・

神裂火織

「その、体で……戦つつもりですか？」

「…………うる、せえよ」

神裂火織

「戦つて、何になるんですか？」

たとえ私を倒した所で、背後には必要悪の教会^{ネセカリウス}が控えています。私はロンドンで10本の指に入る魔術師と言いましたが、それでも上はいるんですよ。

・・・・・教会全体から見れば私など、こんな極東の島国に出張させられるような下つ

端にすぎません。」

「うるう・・・せえつつつてんだろ！――

んなモン関係ねえ！

テメエは力があるから、仕方なく人を守つてんのかよ！？
違うだろ、そうじやねえだろ！履き違えんじやねえぞ！

守りたいモノがあるから、力を手に入れんだろうが！

テメエは、何のために力をつけた？

テメエは、その手で誰を守りたかった！？

だったら、テメエはこんな所で何やつてんだよ！

それだけの力があつて、これだけ万能の力を持っているのに・・・

何でそんなに無能なんだよ・・・・・

「ああ、俺は確かに不幸だつた

この夏休みだけで何度も死にかけたよ、

こんな不幸な夏休みを送つてんのは俺一人だろうさ。

何とか仕事に付けて一層でモivol性してゐるがんで、語りかた

!

冗談じやねえ、確かに俺の夏休みは『不幸』だつた。

つてんのか?」

そうだ。

姫神秋沙を『三沢塾』から助け出したのは、上条当麻だ。

御返昧を『実験』から数一出したのぢり、上条当林だ。

そして。

あの白い少女の笑みを守り抜いたのだつて、恐らくは。

たとえそれが誰かに巻き込まれたものでも、
きっかけはほんの偶然が重なった『不幸』によるものだったとして
も、

その一点だけは誇るべきだ。
逆にゾシとする。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

もしも上条が『幸運』にもこれらの事件に巻き込まれなかつた時のことを考えると、

「確かに俺が『不幸』じゃなければ、もつと平穏な世界に生きてい
られたと思う。

この夏休みだって、何度も何度も死にかけるようなものにはなら
なかつたはずだ」

「けど、そんなもんが『幸運』なのか？

自文がのうのうと暮らしてこむ影で別の誰かが苦しんで、血まみ
れになつて、

助けを求めて、そんなことにも気づかずに…

ただふらふらと生きてこじのふどいが『幸運』だつていつん
だ！？」

「惨めつたらしい『幸運』なんざ押し付けんな！
こんなにも素晴らしい『不幸』を俺から奪つな！

この道は、俺が歩く。

これまで、これからも、決して後悔しないために…」

だから、邪魔をするな。

『幸運』なんて欲しくない。すぐ側でみんなが苦しみでいる事にも
気づけずに、

ただ一人のうのうと生き続けるぐらいなら、

『不幸』に苦しむ人々にいくらでも巻き込まれてやる。だから」JN、上条当麻は言つ。

「『不幸』だなんて見下してんじゃねえ！
俺は今、世界で一番『幸せ』なんだ！」

コウナ

「つは・・・・久々の夢だつたな・・・・」

記憶を消された姫・・・

白い翼の少女・・・

魔眼を持ちし少女・・・

誇りある悪の一人の吸血姫・・・

偽善使いの少女・・・

自分流の悪を持つ一人の少年・・・

本来あり得なかつたモノガタリと正史のモノガタリが交差するとき・
・

新たなモノガタリが始まる・・・

ついでに予感は大抵あたる（後書き）

さて・・・と、次から魔帆良学園編なのです
因みに過去編・・・紅き翼編ですかねも有りますのですよ
次回 このモノガタリにネギつて必要?
では次回もよろしくおねがいします! Bis bald!

教えて！哀川先生！！

哀川

「どもお教師役の哀川でエす
さてさて今回の質問はア？」

哀川

「其れでは答えたいと思いまア
先ず、あの世界では狂気を発動させるほど力の飽和が無いンです
此処が例えリリカルだとしても狂気が発動するンです

とは言つても、「狂気を発動させる程の力の飽和」と言つモノが
分かりませンよねエ
前提としてマナが沢山有ると脳を保護しよオとしてコミッターが
外れちまうンですよ
マナの分まで演算は出来無エですからねエ
其所はどれだけレベルが上がろつと「反射」「ベクトル変換」で
魔法を反射は出来ても
所詮人間ですからねエ
自然のマナは無理です
つウか、やれるモンならやつてますよオ

Q2 能力はこの小説の方が高いんですから操れるんじゃないです
か？

哀川

「さつさきも答えたよオに、前提としてマナが沢山有ると脳を保護しよオとしてリミッター

が外れちまうンですよ

マナの分まで演算は出来無^エですからね^エ
其所はどれだけレベルが上がろつと「反射」「ベクトル変換」で
魔法を反射は出来ても

所詮人間が出したモノですからね^エ

自然のマナは無理です

ただし自転の向きを変えることや、早さを変えることは楽勝です
因みに時も操れます。あと、歳のすすみ具合・身体年齢なども変
えることが出来ます

ま、所謂規格外ですね^エ」

Q3 白翼を出す予定はありますか？

哀川

「此処はネタバレなンですがア、
太つ腹な哀川先生は答えます
出ます

まあ、出所やナンヤラカンヤラは言えないとア
出るとしても魔帆良編が終わつてからですね^エ
魔帆良編つていウのはア、三年になるまでですね^エ」

アンケート

哀川

「さて・・・ネギ君は原作通りいかせたほオがイインでしょオカア？

- 1・原作通り出す
- 2・・・あれ？いない
- 3・ひょーいさせる（所謂・・・転生憑依）

どれがいいでしょオカ？

因みに期限は魔帆良編の魔帆良祭でエス

転生憑依というのは・・・
死んだ三次元の人間が欲望にまみれて主人公になりたいと言つて
憑依して生き返ること
だと駄猫は思っています」

哀川

「今日はこんなモノですかねエ・・・
では、感想を書いてくださいた

Accelerator様、西条玉藻様、ニア様

ご指摘してくださった

ライラ様

有り難うございましたア
時々こんな形で説明会やると思つてソン時はようじくおねがい
します」

因みに魔力、チャクラ、神力をマナとします

教えて！哀川先生…（後書き）

は～い駄猫なのです！

明日は学校休みなのです…！

拓也

「明日はキチンと更新すんだろオなア？」

応さー！

其れでは次回このモノガタリにネギッテ必要？
よろしくお願ひするのです！ニパー

では次回もよろしくおねがいします！B i s b a l d !

フフフ…僕も一般先生として出るのですww

「このモノガタリにネギって必要? (前書き)

前触れもなくキティちゃんと接触なのです

「」のモノガタリにネギって必要?

拓也視点

拓也

「へへ・・・此処が

あの「闇の福音」の家かア・・・」

エヴァ

「貴様・・・何をしに来た・・・」

拓也

「見学?」

エヴァ

「何故私に聞く!・・・・・む?貴様はあのときの男か・・・」

あのときつていつたらぬらりひょんとかガングロとか正義バカ共と
やり合つた時か・・・

ガングロ・・・またちょつかい掛けでくんならぶつ殺そオ・・・

拓也

「みてやがつたのかア?」

エヴァ

「ああ見ていたぞ・・・・「戦うのはいいンだがよオ・・・別に・・・
命さえ残せばいいンだろオ?」の
所からな」

拓也

「まんどんじ始めじゃ無エか！？」

エヴァ

「其れで、お前は悪の魔法使いの所に居てて良いのか？」

「うわ～なんか「ドヤ」って顔してやがるぜ」

「ここは弄つたほオがいいのかア？」

「ア・ア・一度本音と嘘を混じらせてこいつてみよオカ

拓也

「知つてるかア？俺も一流の悪党なんだぜ」

「お前とは違つて娯楽として10000もの少女を殺したしなア・

・ククツ」

エヴァ視点

拓也

「知ってるかア？俺も一流の悪党なんだぜ」
お前とは違つて娛樂として10000もの少女を殺したしなア・・・
・ククツ「

娛樂として殺したなら何故そんなに悲しそうに嘆うんだ・・・

エヴァ

「貴様・・・私をなめているのか？
この形でも私は600年生きているんだ・・・
貴様の嘘ぐらい見破れる」

拓也

「しゃア無エ・・・
俺はある日夢で異世界の自分をみちまつてなア
自分のレベルを上げるために10000もの妹達殺してしまつた
ンだ・・・
手に感覚もあンだよ・・・殺したときのな・・・
まアそつからは大切な1を守るために一流の悪党を名乗つて、関
係無い奴は
出来るだけ関わらないよオにした
今では一流の悪党つてのが俺の道しるべだなア」

貴様は貴様だらう・・・その一言が出せなかつた・・・
私だつてそうだ・・・吸血鬼などなりたくなかつた多分コイツだ
つてそつだらう
昔のままだつたら安全に暮らせだらう・・・
だが、私はコイツに「不幸だつたな」などと言つつもりもない
大体をもつてこの世界の住人はどいつもこいつも救いようがない、
こんな腐つた世界の人間が今更人に救いを求めるなんて間違つてい
る。

人に救いを『えよつと思つなんて馬鹿馬鹿しいにもほどがある。

そんなことぐらい分かつてゐる。

こんな世界の住人だからこそ痛いほどによく分かつてゐる。

エヴァ

「貴様と私はどこか似てゐるんだろうな・・・
いつの間にか自分が違う「モノ」になってしまった所とかな・・・」

「

拓也

「へへ・・・アンタも望んでなつたわけじゃ無いみてエだなア・・・
お前は自分を何ていつてんだア？」

エヴァ

「私か？私は「誇りある悪」を名乗つてゐる
貴様も悪を名乗つてゐるとはコレは・・・」

拓也

「運命つてかア？ククク傑作じゃねエか」

エヴァ

「かもな・・・」

拓也視点

拓也

「あのやア・・・その身体に巻き付いている鎖っぽいモンはなんだア?」

エヴァ

「なに? 其れは解けそうか?」

拓也

「やつてみてやろオカア?」

エヴァ

「頼めるか?」

拓也

「いいぜエ・・・なンせ初めての本当の意味での同類だからなア」

エヴァ

「言い得て妙だな・・・ではよろしく頼む」

結構ウザツたらしく繋がつてやがンなア・・・

此処は右に抜いて

エヴァ

「ンつ・・・」

此処は左に引いて

エヴァ

「う・・・ん

此処を上で

エヴァ

「はふん／／／」

最後にこそオーラー！

エヴァ

拓也

• • • • • • • • •

ピクピクして痙攣してるな・・・
なんが途中で喘いでたなア・・・さて現実逃避はやめよオカア・・・
先ずはこの口ひつ子をベッドに・・・と

拓也

「おウ・・・・起きたよオだなア・・・・
身体の調子はどうだア?」

エヴァ

「…………おじいちゃんが説明しないか？」

拓也

・・・あ、そまだ・・・」の短剣もつとけ」

「なんだ?」レは「…」禍禍し「…」が「…」

拓也

「それは裏切りの魔女と呼ばれるキャスターの生涯の象徴として具現化した宝具であり、刃に触れたあらゆる魔術による生成物を初期化する力を持つんだアこれによりサーヴァントとマスターの契約すら無効化することが可能なやつだなア・・・」

エヴァ

「そんなモノ・・・何故持つている・・・」

拓也

「拾つた」

エヴァ

「はあ！？」

拓也

「ていうか、先ず自己紹介しよオゼ・・・呼び方が分から無H・・・」

エヴァ

「あ、そうか・・・

私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル

「闇の福音」「人形使い」「不死の魔法使い」「悪しき音信」

「禍音の使徒」

「童姿の闇の魔王」などと言われている元600万ドルの賞金首
だな」

拓也

「俺ン名前は哀川拓也

「つ名は」「一方通行」「白い悪魔」つて所かア」

エヴァ

「なら貴様のコトは拓也と呼ぼう」

拓也

「なら俺はエヴァと呼ぼう」

エヴァ

「よろしくな・・・拓也」

拓也

「よろしく頼むぜH・・・エヴァ

テメエがピンチになつたら俺は直ぐに助けに行つてやる

エヴァ

「同じく・・・だな」

ユウナ

ユウナは家でミサカと一緒にソノをしていました・・・
なんでやねん・・・

「このモノガタリにネギって必要? (後書き)

拓也

「エヴァ……か……」

ある意味同類ですしね……

フラグ建てますが(ボソ

拓也

「ン?」

なんでもないのです
ヒロインって誰がいいんでしょつか?

拓也

「千雨は確定なんだろ?」

リアリストは大好きなのです

因みに現実見ずに攻撃魔法しかやらなかつた野菜は大嫌いなのですよ

拓也

「ばつさりだなア……」

好きなモノは好き、嫌いなモノは嫌いなのです
途中から綾瀬は嫌いになつたのですよ……

なうにが魔法を教えてくださいですかっ！

拓也

「・・・まあ自分の信念ならいいんじや無Hかア？」

浅はかなり・・・正義の魔法使い

? 視点

「はあ・・・なんで「」は「」なんに異常なんだ・・・」

ここに来てからよく考えるよいつになつたんだが・・・

普通とは何だ?

異常とは何だ?

自分は普通ではないのか?

自分は異常ではないのか?

皆はここが異常だつていつている・・・

ということは、私が異常なのか?

誰か・・・誰か教えてくれ・・・

拓也視点

拓也

「Hビアと親友になれたし・・・取り敢えず今の予定は無エなア・・・

・」

?

「はあ・・・なんでここはこんなに異常なんだ・・・」

拓也

「どうしたンだア? 気分でも悪いのかア?」

?

「!・?・・・いえ、大丈夫なので・・・」

拓也

「そつかア・・・『普通』なら心配すると悪いンだが・・・」

ピクッ

・・・今・・・普通つて所で反応したかア? ?

?

「此処は『異常』だぞ・・・(ボソッ)
心配していただきありがとうございました・・・
それでは・・・」

拓也

「・・・（精神的に参つてゐるっぽいなア・・・少しでも安心できる
なら）

確かに此処は魔帆良の外から来た俺からすると『異常』だなア・・・

・

「ー? わかるのかー?」

?

ンおー?此処まで反応するとはなア・・・
もしかして・・・認識阻害が効いてないのかア? ?

拓也

「あ、あア

・・・つらかっただろオ?誰にも信じてもうえなくてなア・・・

千雨?

「・・・ああ

・・・幼稚園の時から何か変だと思つてはいたんだ・・・
小学校に上がったとき、私は一度友達に勇気を出して聞いてみた
んだ・・・

そしたら其奴達何て言つたと思つ?

「千雨ちゃんの方が異常だよ」「千雨ちゃん嘘ついてる
だつてさ・・・
だから・・・・・・」

拓也

「・・・つらかっただなア・・・取り敢えず部屋どこだア?
連れて行つてやる

千雨?

「 うひちだ ・・

あア ・・ 聞くンじや無かつたア ・・

後悔したわア ・・ こソンな事聞いちまつたらよオ ・・

救い出したくなるじや無エかよオ ・・

初めてだった・・・

私以外にも此処を異常と思つてゐるやつがいるなんて・・・
私以外にも私を肯定してくれる人がいるなんて・・・
だからついつい柄にも無く話してしまつた・・・
今になつて恥ずかしいとおもつてゐる・・・

?

「あ、そういうや俺ン名前いつてなかつたなア・・・」

千雨

「あ、そうでしたね・・・」

拓也

「そんな話しあじや無くていいんだぜエ
ま、俺から自己紹介をつてなア・・・
俺の名前は哀川拓也
好きなものは特になし
嫌いなものは浅はかさ、正義を自称する馬鹿だな」

正義を自称する馬鹿?

まあいいか・・・

千雨

「私の名前は長谷川千雨
好きな物、小さく無駄のない機械、普通
嫌いな物、人ごみ、予想のつかない事象、異常だな
哀川さんは何時ここに来たんだ?」

拓也

「俺は一週間位前だなア・・・
そう言えば、もオ一週間も経つてンだなア・・・」

拓也視点

「俺は一週間位前だなア・・・

・・・

「そう言えば、もオ一週間も経つてんだなア・・・

感概深くもなるぜエ・・・

それより・・・魔法云々の事は伝えたほオがいいのかア?

駄女神

（原作・・・といつても知らないと思しますが
ブレイクしてくれていじですよ

ちなみに抑止力などはこいつで食い止めるのでどうぞお好き上へ）

まアた前ぶれも無く出てきやがってよオ・・・

このタイミングで出てきたと皿のひとくわくサインって事だよなア・・・

なら・・・・・!

拓也

「一つ面白じいことを教えてやるぜエ・・・
聞くかア？」

千雨

「面白じいこと?」

拓也

「判断は好きにじやがれ・・・『違こと』と思つてくれても普通に信じ
てくれても
どっちでもいいぜエ」

千雨

「哀川さん・・・話してくれ・・・

拓也

「なら話してやる・・・

「この世界には魔法使いつてゆうのがいるんだ・・・
まあ、殆どの魔法使いが正義の魔法使いを自指しているんだ」

千雨

「バカ？・・・ああ・・・正義を自称する馬鹿な

拓也

「そう、本当はマギスティル・マギツツウ職業なンだがよオ、
これ聞いてみな」

千雨

「ん？」

ジジジジ・・・

「我々は正義の魔法使いなのだー！貴様は我々を[テキ」

・・・うざい予感は大抵あたるをリピート・・・

拓也
「ほれ」

千雨

「要するに、浅はかな正義を自称する馬鹿が嫌いなわけだ……」

拓也

「かく言つ俺もおまえが言つてた異常だからなア……ククッ
どうする?」

ちなみに千雨には「一つの道がある」

千雨

「…………教えろ」

拓也

「了オ解

「一つは俺と一緒に行くがだなア……
この場合のメリットは俺が守つてやる」と
デメリットは浅はかな正義を自称する馬鹿がちよつかいをかけて
きやがる事だなア」

千雨

「…………」

拓也

「記憶を消すこと……かつ、認識阻害を聞きやすくなる」と
この場合のメリットは異常に関わらなくてすむ
デメリットはもし関わってしまった場合誰も守れないとだなア」

千雨

「…………」

拓也

「答えはまた今度きかせてく

千雨

「あんたについて行く……あの話聞いてて浅はかなのに命は預け
れないからな」

・・・れ・・・・返答早すぎンだろオ・・・

まアいい・・・俺の仲間を紹介するわ・・・今度にな
あ、後これもつとけ」

千雨

「ん?・・・・・これアイギスの盾じや無えかー?」

拓也

「?・・・・有名なモンなのかア?拾つたンだが・・・

千雨

「ズ」「!…おいおい・・・

あ、それとあたしのメルアドだ

拓也

「お、そつか・・・俺のも・・・ほれ」

千雨

「此処があたしの部屋だ・・・」

拓也

「ン・・・そとか・・・じやあまたなア」

千雨

「・・・・・うん、またな」

浅はかなり・・・正義の魔法使い（後書き）

ムムム・・・

拓也

「どうしたんだア？」

ちつと難しかったのですこの話・・・

拓也

「どうしてだア？」

千雨の人物像がぶれにぶれたモンで・・・

拓也

「あア・・・おまえだからしじょうがない

・・・しじょうがないのです

まあ多田に見てくださいなのです
では次回「継ぎ接ぎだらけの正義」

よろしくなのです

因みにテスト一週間前をすぎたのです

にぱー

しんでH・・・

ヤバイのです・・・ヤバイのですよ・・・
期末なのです・・・ミスつたら挽回すんの難しいのですよ・・・
勉強しなきや・・・と、言いつつの更新です
赤点はとらないぞーー！

継承接ぎだらけの正義

拓也視点

拓也 「お、そうか・・・俺のも・・・ほれ」

千雨

「此処があたしの部屋だ・・・」

拓也 「ン・・・そオカ・・・じやあまたなア」

千雨

「・・・うん、またな」

拓也

「でで来いよ・・・ガングロ・・・
ずっとつけて来やがつてよオ・・・ストーカーですかア?このヤ

口オ」

ガングロ

「私はガングロではなくガンドルフィーーだ!!
貴様は此処にいてはいけない悪だ!!」

・・・ここから出て行く気は無いのか?「

拓也

「ン?無エゼ?ンでなンだア?」

自分に都合の悪い相手は悪にする浅はかな正義を自称する馬鹿達?「

ガングロ

「・・・そつか・・・出て行く気は無いのか・・・

なら・・・これより哀川拓也と言つ悪に正義の鉄槌を!-!」

正義の魔法使いD

「死んでもこいつを倒す!!

来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。『闇の吹雪』

!」

正義の魔法使いE

「ああ!

氷の精靈17頭。集い来たりて敵を切り裂け。『魔法の射手・連
弾・氷の17矢』」

正義の魔法使いF

「やつたか!?」

それは三下の死亡フラグだぜエ・・・

ガングロ

「気をつけろ!-!」

拓也

「なんだア？今の・・・

あれだつたら優奈の「そげぶ」のが効くぜエ？
あ、それと言つたよなア？

次なンらかの接触を図つてきたりテメエ達全員ぶつ殺すからつて
よオ・・・

つウ訳で・・・セア・・・・

殺して解して並べて揃えて晒してヤンゼエ

スパパパパ

ガングロ

「何ツ！？」

おオおオ・・・驚いてる驚いてる
やベエ・・・・樂しくなつてきたア・・・
面白くないからネタバレしよオかねエ？

拓也

「今使つてんのはなア・・・

曲絃糸つていうンだぜエ・・・」

正義の魔法使い G

「なら・・・

魔法の射手 集束・雷の三矢！燃えろ！！」

拓也

「バカかア？普通の糸じや人切れないのでオ？（切れることも無いがな・・・）」

正義の魔法使い G

カ

G

「ひ、ヒイイイイ死にたくない……俺はまだ死にたくないいいいい！」

拓也

「ざアンねエンでしたア……ククク
また来世エ！！」

スパン

正義の魔法使い^{バカ}エ

「嫌だ嫌だ嫌だアああああ！」

ガングロ

「ま、待て！！」

曲弦糸の中に飛び込んで行きやがつたぞオ
あらら・・・真つ二つじやねエカ

拓也

「飛んで火に入る夏の虫つてかア？
はア・・・でもやつぱり俺にや曲弦糸似合わ無エなア・・・」

潤 友視点

潤

「友ちゃんに言われて来てみればなんだこの惨場・・・
しかも今糸使つてる奴「人間失格」に似てないか?」

猫田 友

『『おいおい潤ちゃん・・・』『似てるのは納得するけど・・・』

『『アイツ僕様ちゃんの作品だぜ?』『強いに決まつてる』』

『なあそのしゃべり方どうにかなりねえか?イライラするだ

友

「『そりは言われてもなあ』『他の人がいる間はこのしゃべり方だぜ?』

『打つのめんどくさいけどな』『

潤

「軽くメタ発言したな・・・」

まあ、この世界で類はどういう風に生きていくのですか?
前の世界では何も出来なかつたみたいですねけどね・・・

哀川拓也よ・・・

地獄という地獄を地獄しろ

虐殺という虐殺を虐殺しろ

罪悪という罪悪を罪悪しろ

絶望という絶望を絶望させる

混沌という混沌を混沌させる

屈従という屈従を屈従させる

遠慮はするな誰にはばかることもない

我々は美しい世界に誇れ

ここは死線の寝室だ、存分に乱れる死線が許す

友

「『そりは部屋にもどるかあ』『いくよ潤ちゃん』

潤

「あこみ・・・」

拓也視点

拓也

「さて・・・残りはテメエ一人だぜエ?
なアにが正義の鉄槌だア?」

それにてめえは誰であろうと悪にすンのかア?

違うだろオガ・・・

先にいつといてやるテメエの行き先は地獄だア
テメエ達の仲間の元に送つてやる

ギャング口

「つぐ・・・殺すなら妻に伝えてくれ・・・

」

「こんな夫ですまなかつた」とな・・・
・・・一つだけ聞かせてくれ、私は・・・いや私たちは間違つて
いたのだろうか・・・」「

拓也

「俺が知つてゐる筈が無エだろオが
だがなア・・・俺はな・・・
俺の光が助け損ねた奴がいんなら俺は一人も余さず救つてみせる
つて決めてンだよオ・・・
だからこそ俺は悪でいないといけないんでなア・・・
アイツに降りかかるすべての恨み、憎しみを受け止めるためにも
な・・・

「じゃあな」

グ
チ
ヤ
！
！

駄女神視点

はあ・・・拓也くんだんだん一方通行に似てきてますよ考え方・・・
あなたには支えがいるのだから頼つても良いでしょうに・・・
・・はあ・・・先が思いやられる・・・

ユウナ視点

ユウナ

「私に出番をくれええええええ！」

ミサカ

「はあ・・・。ヒミサカはため息をつきます」

隠れ接ぎだらけの正義（後書き）

どうでしたでしょうか？

あれはオリキャラではなく僕の分身ととつてくれてもいいのですよ
時々でるのです・・・

一応普通の先生なのですよ？あの一人

拓也

「今回なんか疲れたぜ・・・

指がつりそオだった・・・」

あはは・・・

ガングロの居場所には普通の魔法先生が入るのです

拓也

「さよオカ・・・」

では次回「よつやく私の出番だーー！」
みじくなのです

めひやべ私の出番だーー（前書き）

生物・保険は良かったのですが・・・
英語乙

はあ・・・

では哀川くんのネギまー? 戦記始まるのです

「ついで私の出番だー！」

第三者視点

コウナ

「あ～久しぶりの出番だ～」

ミサカ

「メタですね。ヒサカは一応反応します」

コウナ

「だつてさあ・・・一週間ぶりなんだぜ？駄猫が期末あるから更新できなくなるしょ～」

ミサカ

「・・・先生がきたよいつです。ヒサカは返答に困つたので違う話にかえます」

因みに、今優奈ヒサカがいるのは2-Aの教室です。

補足で「継ぎ接ぎだらけの正義」のガングロイベントとの少し前です
千鶴ちゃんは今日は早退したようです

友視点

友

「『どうも～』『数学の時間だぞ～』『早くさつきの時間の道具か
たづける～』」

ユウナ

「友先生ってや・・・本当に男なのか？」

まき絵

「確かに疑問だよね」

友

「『そこそこ話すのとは言わないけどさ』『僕様ちゃんの時間に
は止めるぜ』」

『まあ、こいや、『んじや授業はじめるよ』』

このか

「切り替えはやいなあ」

コウナ

（激しく同意するけど喋つたら黙てられまつよな・・・たぶん）

友

「『んじや、P39の問い一を・・・』『誰かやりたい人いるかい？』

『『ま、いないだろうね』『今日は6月28日だから・・・』』

あ、そういうこのクラスの番号とか言つてなかつたですよね？
というわけです。

- | | | | | |
|-----------|---|-------|------|---|
| 1 | ・ | 相坂 | さよ | 幽靈なのです |
| 2 | ・ | 明石 | 裕菜 | バスケ部なのです |
| 3 | ・ | 朝倉 | 和美 | パパラッチなのです・・・どーじーの鳥と同 |
| じ臭いがするのです | | | | |
| 4 | ・ | 綾瀬 | 夕映 | 哲学者なのですかね |
| 5 | ・ | 和泉 | 亜子 | 関西弁（？）キヤラなのです |
| 6 | ・ | 大河内 | アキラ | 母性が・・・母性がアアア |
| 7 | ・ | 柿崎 | 美砂 | 唯一彼氏がいるのです |
| 8 | ・ | 神楽 | 坂明日菜 | 実は・・・ |
| 9 | ・ | 春日 | 美空 | シスターさんなのです |
| 10 | ・ | 上条 | ユウナ | 幻想殺し・・・ <small>ともだち</small> 拓也の相棒的な感じなのです |
| す | ・ | 口リコン？ | | |
| 11 | ・ | 絡繆 | 茶々丸 | ロボット？なのです 因みに私の好きなラン |
| クでは5位なのです | | | | |

12	釣宮	円	くぎゅう	w
13	古菲		戦闘好き	なのです
14	近衛	木乃香	占い好き	同じく5位なのです
15	早乙女	ハルナ	もちトラブルメイカー	あと電波塔なのです
16	桜咲	刹那	お嬢様アア	・・・因みに4位なのです
17	佐々木	まき絵	新体操	・・・スゲエ
18	椎名	桜子	運E	×なのです・・・魔帆良のサクラ
19	龍宮	真名	タツミー	かあいよお・・・3位なのです
20	超 鈴音		チャオ	リンションなのです・・・鈴音
	と呼んだ私は悪くない			
21	長瀬 楓		忍者	なのです にんにん
22	那波 千鶴		再び母性	の固まりなのです
23	鳴滝 風香		一方通行	風に言うとガキなのです
24	鳴滝 史伽		上に同じく	なのです
25	葉加瀬聰美		まっど	さいえんていすとなのです
26	長谷川 千雨		ちうたん	なのです・・・もち第1位なのです
27	E v a n g e l i n e	A . K . M c D o w e l l		
	キティちゃん	なのです	2位	なのです
28	・ミサカ特別号		うん可愛い	よねミサカ
29	・宮崎 のどか		ネギラヴァーズ	の一人・・・決意堅いのです
	好きなのです	7位		
30	・村上 夏美		なんか書くこと	あつたかな・・・?
31	・雪広 あやか		お嬢様	なのです・・・ショタコンでもあります
32	・四葉 五月		毎日飯作つ	てくれエ!!
33	・Z a z i e	R a i n y d a y	なでて	みたいおお・・・

以上なのです・・・

え?自分の考え出過ぎ?知らないねえそんなこと
うへへ・・・引っ張らないで潤ちゃん

友

「『28番についてみよっかな』『ミサカがへやつてみよっ』『

因みに2(x+y)+3(2x+5y) 』 こう式なのです

ミサカ

「8x+17yです。ミサカは余裕の表情をします

かあいよおおおお!~!

友

「『よく出来たね』『次は28-6で22番についてみよっか』『那
波ち~いってみよっせ』

『レッジジGO-』『

今度は1Jのボ5(x-2y)-2(2x-7y)

千鶴

「ええと・・・x+4yです」

友

「『正解だぜ!』

ユウナ 視点

友

「…………『』めんだけようと用事があつたから』『ちよつと
血溜ね』『

なにがあつたんだろ・・・
む?・・・拓也の殺氣だよな・・・いくつさやないか・・・

ユウナ

「私ちつとお花摘みに』

ミサカ

「私も。と一応言つておきます」

さつわと行くか

ガングロ
「つく・・・・殺すなら妻に伝えてくれ・・・
「こんな夫ですまなかつた」とな・・・
・・・一つだけ聞かせてくれ、私は・・・いや私たちは間違つて

いたのだろうか・・・

拓也

「俺が知ってる筈が無エだろオが
だがなア・・・俺はな・・・
俺の光が助け損ねた奴がいンなら俺は一人も余さず救つてみせる
つて決めてンだよオ・・・
だからこそ俺は悪いないといけないんでなア・・・
アイツに降りかかるすべての恨み、憎しみを受け止めるためにも
な・・・

じゃあな

グチャヤ！！

ユウナ

・・・・・ おい 拓也 ・・・・・

拓也

ー
ン? · · · 来ちまーたの k

バ
キ
ツ

ユウナ

「誰が！おまえにすべて背負えと言つた！！
私は・・・おまえの隣にいたかつたんだよ！-！唯それで良かった
んだ！-！」

拓也

「・・・・なら・・・・俺のいる意味無Hじやん・・・・殺やすにすむ筈だったとか言うンじや無Hの?」

ユウナ

「私は上条当麻じゃない・・・私は上条優奈なんだ・・・
あんな事言えない・・・おまえは背負つてきてるじゃないか・・・
拓也・・・おまえは一方通行じゃなく哀川拓也だろ!
ならおまえは・・・」

拓也

「・・・すまねエ・・・先に家に帰らせてもらひ・・・」

コウナ

「・・・・・」

拓也視点

はア・・・俺どうしたらいいんだろか・・・
俺はもしかして全部背負つって言うのを理由にしてマイツの隣にいた
ンだろとか・・・
俺は・・・どうしたら・・・

ミサカ

「待ちなさい。ミサカは制止の声をかけます」

拓也

「お前までなンなンだよ・・・説教かア？」

ミサカ

「あなたは十分にユウナを守っています・・・
でも、・・・でもパートナーって言うのはお互に頼るのでは無い
のでしょうか？」

私はあなたよりも、優奈よりも弱い・・・

あなたが何も出来ないと言うなら私は何も出来ませんよ・・・。

ミサカは本音をくちにします

拓也

「・・・お前にしづや珍しいな・・・意味わからんねエし・・・
でもその言葉は良かつたぜエ・・・
ンソオだな・・・これからは肩の力抜いていきつかア・・・
・・・・・・ところで優奈とミサカ一人とも学校じゃなかつた
かア？」

ユウナ

「・・・あ・・・」

ミサカ

「あ・・・とミサカは・・・はあ・・・

俺のこと心配してくれたのかねエ・・・
ありがたいねエ・・・

今日の夜ぐらじこめらつひょんに呼ばれるだろオなア・・・鬱だア・

・

ユウナ

「・・・拓也・・・これからは頼つてくれよ・・・わたし達は仲間なん
だからや」

拓也

「・・・おウチ・・・」

ガサゴソ

ダンティ

「・・・拓也くん・・・だったか?」

拓也

「ンだア？」

ユウナ

「高畠さんだつたか・・・」

ダンディ

「君がこころしたのかい？」

拓也

「そオだガア？」

ブォン

拓也

「いきなりナニすンですかア？」

俺になんか恨みでもあるンですかア？」

. . .
to
be
continued

白い翼だせそうです・・・
ギャングロの代わりの代役があ・・・

拓也

「・・・強引だなア・・・やつ方・・・」

いいじやん「しりあす（笑）」しかかけないおいらだし
では次回「ダンディは一応生かしどこ」
よろしくなのです！ m（――）m

ダンディは「必生かじとい」（前書き）

今日のテスト・・・・・ o r z

まあ、気を取り直して

では袁川くんのネギま！？ 戦記始まるのです

・・・コウナを優奈つて書いてたのです・・・ o r z

ダンティは一応生かしど

拓也視点

ダンティ

「・・・拓也くん・・・だつたか?」

拓也

「ンだア?」

ユウナ

「高畑さんだつたか・・・」

ダンティ

「君がこりしたのかい?」

拓也

「そオだがア?」

ブオン

拓也

「いきなりナースンですかア?」

俺になんか恨みでもあるンですかア?」

ダンティ

「君に同僚を殺されてしまつたからね・・・」

・・・自業自得じゃね?

だつてや、俺前来たとき元確か・・・

「 もオいいわア・・・正義の魔法使いにはほとほと呆れた・・・
魔法が使えなかつたら「落ちこぼれ」強すぎたら「悪」なアにが
立派な魔法使いだア ?

でも、組織の上に立つモンが土下座したンだからしじうが無H・・・

一応居てやンよ・・・でもなア・・・次なンらかの接触を図つて

きたらテメエ達全員

ぶつ殺すか?「

つて言つたよな・・・

あれ?もしかしてダンディいなかつた?

ボイスレコードーに入れてなかつたよな・・・
はア・・・・話すのメンドイし、殺したらなンか言われそつだし
よし、ついてきたら氣絶させつかア

拓也

「ハイハイ・・・スマスマセンねエ・・・
じゃあ・・・お疲れ様でしたア」

ダンディ

「逃がすと思つかい?

・・・・「ウナくん・・・君は何でこんな悪者とこるんだい?
齧されたのかい?安心しなさい・・・僕のこ」

バキッ

拓也

「ウゼH・・・コイツダメだわ・・・色々

ユウナ

「・・・」人の、いやコイツも既に正義面してやがんのか・・・
担任としても学校に中々来ないし・・・
正義名乗るなら自分の生徒をちゃんと見やがれ
あと、拓也を悪くいうな

・・・そこまで真顔だと照れるぞ・・・

さて・・・と、コイツは一応生かしておこう
確か紅き翼つていうグループに入つてたつて言つぐらいだし
殺したらそれこそ全世界が敵だらけになるしな・・・俺はイインだ
ケドよオ

ユウナに無理させたくないし、あとメンドクセヒメンドクセヒ
・・・え?メンドクセヒが本音じゃないかって?

モチロン本音セヒー

エヴァ

「・・・もう終わつたよ!だな・・・」

拓也

「おうエヴァ」

ユウナ

「・・・闇の福音?」

エヴァ

「タカミチが来たと聞いたんだが・・・樂勝だつたようだな・・・あと、そこのは誰だ?」

拓也

「あン時言つただろオ? 大切な1だ」

エヴァ

「フム・・・なるほどな・・・
そう言えは紹介していなかつたなコイツは茶々丸だ」

茶々丸さん・・・綺麗にお辞儀してやがるなア・・・

拓也

「いわちこちよろしくたのむぜ」

ユウナ

「私はユウナ・スプリングフィールドだ・・・
よろしくな!」

ミサカ

「私はミサカです。とミサカは簡易的な自己紹介をします」

エヴァ

「(ペクッ)・・・ナギの娘か」

拓也

「コイツ娘であつて娘じゃねエからな」

ユウナ

「ああ、私は前世の記憶を持つ所謂転生者だな」

拓也

「因みに俺も・・・まあ、俺の場合はトリッパーだな
異世界人だぜ」

エヴァ

「フム・・・異世界か・・・些か信じられんが・・・
拓也が言つなら本当なんだろつ」

ユウナ

「（ピクッ）へえ・・・拓也、私が知らないといひでこ～んなに仲
良くなつてたんだあ

・・・後でO・H A・N A・S H I Eシナクチャナ・・・」

拓也

「・・・ば、暴力はいけねエゼ・・・
まあ早く移動しよオゼエコイツの日が覚めるとメンディイ」

エヴァ

「なら私の家に来い」

移動中にダンディ（笑）復活・・・しかし、誰もいないようだ

エヴァ

「ここだ」

拓也

「邪魔するぜエ」

チャチャゼロ

「邪魔スルナラ帰レ・・・ケケケ」

ユウナ

「うあ！？人形が喋つた！？」

チャチャゼロ

「人形ガ喋ツテモイイダロウヨ・・・

後、ソノノモヤシ

拓也

「モヤシ言つな解すぞオ」

チャチャゼロ

「ケケケ・・・才陰^テ動ケルヨウ二ナツタゼ

礼ヲ言ウ

拓也

「ン・・・

エヴァ

「あ、お前からもりつた裏切りの魔女の宝具のお陰で誤魔化せたぞ
礼を言わせてもらひ」

ユウナ

「・・・まあいいか・・・をひと、じつするへ

拓也

「すまねエが今田はソロ泊まらせてもりつていいかア?」

エヴァ

「今日だけとは言わず何時まででもいてくれていいからな

拓也

「ヤベエ・・・なんか泣けてきたぜ」

ユウナ

「あれだな・・・やつたことが帰つてきたんだな

やつてきたこと? 俺がしてきたことといえば・・・

幻想殺し、一方通行を家に泊めたとか遠坂凜をとめたとか・・・あ、そつ言えぱとめまくつてるな

拓也

「まあ、外にマンションあつからなア取り敢えず今日はこさせてもらうぜ」

エヴァ

「そつか・・・残念だな」

ミサカ

「私は拓也の横で寝させていただきます。ヒサカは先にとつておきます」

ユウナ

「つちよ! ? ズリイぞ! !

エヴァ

「なら私も」

ユウナ

「ナニイイ! ?

・・・明日天氣になれ・・・

現実逃避は一時中断して、ビリシよオ・・・理性クンが耐えてくれるかねエ?

やばくなつたら逃げよオ。そオしよオ

拓也

「もお寝させてもらひつわ・・・演算してたから疲れちまつたぜ」

明日は図書館島だっけかア？をまわろおか
ではお休みなさい・・・

茶々丸

「ベツドで寝てくださいね

拓也

「かアさん俺ソファーでイイつてばよオ」

チャチャゼロ

「母サンツテナア・・・」

ダンディイは一応生かしどこ（後書き）

感想書いてくださった方、ポイントをつけてくださった方
お気に入り登録してくださった方・・・
本当にありがとうございます！！
感動なうなのです！！

さて・・・

アンケートをしているのですが、
内容は

野菜は原作そのままでオッケーですか

1. 原作通り出す
2. ・・・あれ？いない
3. ひょーいさせる（所謂・・・転生憑依）
どれがいいでしょとか？

因みに期限は魔帆良編の魔帆良祭です

転生憑依というのは・・・
死んだ三次元の人間が欲望にまみれて主人公になりたいと言つて憑
依して生き返
ること
だと僕は思っています

今のところ

1が3で、2が1です

では次回「誰がアクセロリータだア！！」
よろしくなのです！ m() m

七夕記念 哀川くんと愉快な仲間達戦記

拓也 視点

あ～どうもオ
駄猫がとちくるつて短編で七夕記念しやがりました
取り敢えず今回のゲストはア

桜才戦記より

天草シノ、七条アリア、津田タカトシ、萩村スズ、遠坂凜

ネギま！？戦記より

ミサカ、エヴァンジェリン、茶々丸、長谷川千雨、猫田友

共通で

俺こと哀川拓也、上条優奈

まア、だからといって何でも無いんだがこの話は両方にひっされる
片方しか知らない奴もみれる
よオにするらしいぜエ

因みに俺は司会者役だぜエ

拓也

「じゃア・・・取り敢えず乾杯！！」

全員

「乾杯！」

拓也

「セセ、セセに向かうとするかね・・・
まあネギま！？戦記のほオ行こうかア」

さて、駄猫が出られない理由ってのがあってなア・・・
猫田友が一応アイツの分身らしイ、詳しいことは聞いてねエがな

拓也

「邪魔すンゼH」

友

「『邪魔すんなら帰れ』『このリア充め』」

拓也

「あいよオ・・・・・って言い過ぎだろオが
吉本 喜劇でももつと優しいわ！！」

エヴァ

「やめんか・・・・酒が不味くなる」

千雨

「未成年が飲むもんじゃねえだろ・・・」

茶々丸

「マスターは一応600歳を超えてるので大丈夫です」

エヴァ

「一応とは何だ！？このボケ口ボ！？巻いてやる巻いてやるウウー！」

茶々丸

「ああ／＼激しそぎます／＼」

拓也

「・・・・ミサカどうやって収集つける？」

ミサカ

「ああ？ミサカはどうけた振りをします」

拓也

「振りじやねエか！－」

友

「『そんなにツッコンでしんどくない？』『僕様ちやんならしんどいよ』

『嘘だけど』『学校ではボケキャラなんだよ』『下ネタだけどね』

「

拓也

「『タ』つけんじやねエ－どこかなんたらボックスの大嘘憑きと似ていてうせ－－」

友

「『ねうつてるんだよ』『独特なほうが受けイイでしょ』『どう思ひ？ミサカちー』」

ミサカ

「私的には、

全裸には萌えがないですね。服は脱がしても靴下は脱がしてはいけません。

たとえ太陽が西から昇ることがあらうとも絶対絶対これは萌え業

界の鉄則ですね。

ホモサピエンスと動物の違いは何ですか？ そう、衣服の着用です。つまりヒトは衣服があつて初めてヒトなのです。それを全部脱がすことでしか欲情できない貴様らはヒト以下ですね。

動物と同じですよ。制服系の御三家と言えば何ですか？

答えてみてください。

そうです。制服、体操服、スクール水着ですね。

なおセーラーかブレザーかの好みの違いは制服にカテゴライズするものとします。

勿論、ブルマーかスパッツかの違いも同様です。

スク水も紺か白かの違いはあれどカテゴリーは同じ扱いです。

どうですか？ これだけでも甘美な響きがするでしょう？

では貴方たち2人がこれらの内の一つずつが好みであつたと仮定しましょう。

拓也、貴方は制服です。猫田先生、貴方は体操服です。頭に思い描け、時間は3秒です。描けましたか？

妄想くらい自在に出来てください、気合が足りませんやり直してください。

では貴方たちの望む衣装が登場するエビテオがここにあります、あるとthoughtしてください、

あると信じてください気合を入れなさい。

返事は押忍かサイイエッサーです。

馬鹿者それでも軍人ですか？ よおし描けたようですね次に進みます。

それらの萌え衣装が、

貴様らの馬鹿げた欲情に従い一糸纏わぬ姿にひん剥かれたと思ってみてください。

ですが、貴方たちよく考えてください。

全部脱いだらもうそれはコスプレHじゃないですよ？

最近そういう詐欺紛いなAVが増えてるが実に嘆かわしいです。服を全部剥いだらもうそれは文明人ではない、動物です。全裸にしか欲情できない貴方たちは犬、猫ですね。

失せてください。ゲットバックヒアーニミサカは固有結界してみます」

拓也

「なア・・・なンでアイツにバスしたンだア?」

友

「『わすがの僕様ちゃんでもさ』『激しく後悔しているよ』

・・・さて、次の所に行こうか

拓也

「やつて来ましたア! 桜才戦記! -!」

凜

「なんでそんなにうれしそうなの?」

優奈

「さつきの見たらわかるぜ・・・私は激しく後悔した
知らないでイイ一面をみた感じだな・・・パンドラの箱?みたい
なもんだな」

・・・どちらかといつとあそこまではつけられると
もオジウでもいいよオに感じるぜ・・・黙猫でさえやつちまつた
つていつてたしな

それに比べてココはまだ良い感じだな・・・

タカトシは普通だし

タカトシ

「普通いっていわないで!-!-」

スズはちつこいし

スズ

「あんだとコラアーー!-!-」

会長は・・・まあいいか

シノ

「っく・・・なんだこ」の快感!-!-」

・・・

七条先輩はまだ常識人(笑)だし

アリア

「あらあら!」

凜はシシ「//」だし、シン「/」レだし、なんかうつかりだし

凜

「これは血なのよ……先代もその先代も……」

優奈はいろんな世界一緒にだし

優奈

一 緒たもんなん

拓也

「それいや……ほかの作者さんの見た駄猫がよれ
「東方」きつい……」「バカなことを言つて、バ

「東方かきたしな」とかバカなこと言つてやがったせヨ。。。

優奈

一 東方 て いえはさ ・・・

か、簡単に言つな————！

あの辻は自分でも簡単には使えない奥義中の秘奥義がそ！

め古代中国では極奥義と恐れられ、

武道家が死を熙して倒す最後の実相奥義が、たのむつて言つておれ。」

そこで出てきたのが残機制ではないかという説だ。

のことを認めるよりは、

そもそも日本文化には残機制を理解した古典が少なくない。

そもそも列機制は古事記の神々の元の基づかたがんが傳今どもせんぶのは前より

違ああああうシ！！

真の残機制とは、死亡時に決められた復活地点まで戻つてリプレイのことなのだ！

死んだその場で復活なのは一見残機制に見えて実はそれはバイタリティ制と変わりない！

このショーティングゲームとして当たり前かつ重要なシステムが、皮肉にもショーティング界のビッグタイトルにて崩壊するとは誰が予見したであろうか！

かつてショーティング界に金字塔を打ち立てたあのグラディス！！

あのゲームは死亡するとパワーアップが全てゼロに戻り、しかも決められた復活地点まで戻されての再開になつたため、高次元ステージともなると、復活してはすぐ死亡、また同じ場所にまき戻されて死亡を延々と繰り返し、

残機数が何機あつても無意味じゃないかー！

これはハマリだー！！とハマリなる言葉すらも生み出したのだ！これに対して続編である沙羅蛇は、何と当時のショーティングとしては斬新な、

その場復活という概念を生み出したのだ！

これならお子様でも安心さ！

どんなステージもボスも残機数とコンティニューの50円玉さえあれば誰だつて力技でクリアーできるー！！

でもこの時点でゲームの神聖性は失われたのだ！

何度も繰り返しても勝てない敵、ボス、ステージ！！

それについて打ち勝つた時の爽快感はまさに『ひぐりし』！

抗えぬ昭和58年の運命を打ち破つた時の爽快感は、闘い挽歌を2年以上も攻略し続け、

ついにクリアした時の爽快感にも似る！！

今時のゲームにこれほどの長期にわたつて攻略意欲をそそられる

ゲームがあるだろうか？

いやないッ！！ それはなぜか？ 力技で誰でもすぐにエンディングが見られてしまうからだ！！

どんな無様なプレイであろうとも、一度クリアしたゲームは魅力が薄れてしまう。

そうして軟弱なプレイヤーはそのゲームの真の攻略を目指すこともなく作品に飽きてしまうのだ！

結局、この軟弱な時代を生み出したのは、他ならぬ軟弱なゲームたちだったのだ！！

コ ミはそのミスを認めた！

その証拠に、グラディ シリーズはその後の正当後継作ではその場復活制を廃止して
再びハマリシステムを復活させている！！

いやでも東方はその場復活でいいんです。

だってロイヤルフレアで死ぬ度にステージの最初に戻されてた日にや、

いつんなつたら妹さまに会えるんだーー！！

未だ自力じや紅魔郷と妖々夢のエキストラのラスボスに会つたことがないんですけどーー！！

お願ひですＺ Ｎさん、エキストラステージでもコンティニューさせてください

力技でもいいから妹さまやゆかりんに会いたいんですううううー！

というか世の中の人つて何でみんなこうも簡単にエキストラをひょいひょい解けるんすかあああ！！ 足りないのは愛か動体視力かリビドーかああ！！

あーもう次の東方オンリーでは撃つと動く人とお人形使ないと貧血

魔女の三角関係

サウンドノベルを書きたいいいい、もちろん最後は惨劇でｗて

!

どうすかハ咲桜さんB-1をあああん!!!! つて叫んでたんだ
が・・・

どうなんだ？」

拓也

卷之三

優奈

・・・ おい駄猫 ・・・ これ以上やつたらいろんな意味で乙るぞオ

拓也

1

「気になるぜ……」「

拓也

「会長はゲームとかあんまりしなさんオだよなア」

シノ

「そつだな、私はあまりしないな・・・」

石也

「して そ う な の ・・・ タ カ ト シ、 優 奈、 凜 ぐ ら い じ ゃ ね？」

「タカトシ
「だろうね」

拓也

「やうにいふと、おおむねは、夕田しそんだな……」

因みにバーイン開始は16時だ世上

馳貓視點

え？ 友じやないのかつて？

そうやね、敢えて言うなら何の能力もない平凡な少年です。

・・・七夕が誕生日の人おめでとうございます！

今日が誕生日のひとつと

夢喰いメリーオ藤原夢路さん お誕生日おめでとう！
インフィーバート・ストライクス
ISの篠ノ之箇さん お誕生日おめでとう！

TO LOVEる - とらぶる - のリリ・サターン・デビルークさん お誕生日おめでとうーー！

お誕生日おめでとうーー！
お誕生日おめでとうーー！
お誕生日おめでとうーー！
お誕生日おめでとうーー！
お誕生日おめでとうーー！

遊 戲 王の海馬モクバさん お誕生日おめでとうーーー！

・・・ネギま！？のキャラは？生徒会役員共のキャラは？
残念・・・俺こましきられませんでした・・・

と、言つわけでもありますでしたが今回ま・・・
つとその前に・・・

拓也視点

拓也

「へへ・・・・意外と星つて明るいんだなア・・・・

優奈

「そうだな～・・・

拓也

「あ、そういう優奈はもオ短冊かいたかア？？」

みんなエヴァのお酒を飲んで落ちてるぜH

優奈

「…………ん？ああ…………書いたぞ」

拓也

「ほオ…………ビンなコト書いたンだア？俺に教えてみ？」

優奈

「え、嫌だよ／＼／＼ベ、別に拓也とずっと一緒にいたいなんて書いてないんだからな！／＼／＼」

拓也

「…………これが萌えか…………（ブハツ）」

優奈

「え！？ちよつ！？拓也！？」

拓也

「時が見えるよララア…………」

優奈

「誰だよ！…………折角一入きりだったのに…………不幸だなあ…………」

・

拓也

「…………我が生涯に一片の悔いはねエ――（> ^ b）（鼻血だしながら）」

駄猫視点

まあ最後の最後まで ああ ああ でしたなあ (、 - 、)
まあ、番外編なんであんまし気にしないでください、 (、 - 、)
ノ
では次回・・・

グサツ

ゲフ・・・何故・・・何故咲夜さんがここにー・?

咲夜

「私の出番が無かつたからよ・・・
では次回もよろしくお願ひしますわ・・・

駄猫・・・ちょっとじつちに来なさい」

七夕記念 哀川くんと愉快な仲間達戦記（後書き）

はあはあ・・・死にそうになつた・・・
あれならまだ魔砲のほうがいいですね・・・
ゲフッ
・・・お休み・・・咲夜つしゅ・・・

アクセロロータじゅねエエー！

拓也視点

えエ・・・タイトルで言いましたよつこイ
俺はロリコンじゅねエー！ンですよオ・・・
エヴァ、コウナといふからつて、俺は決してロリコンじゅねエーで
す！

まア、両方とも幼児体型なンだがなア・・・
後、俺はエヴァを15才まで身体年齢を上げれるぜ
え？15才以上は駄目かつてエ？
・・・一応あの子中学生だかんなア？怪しまれるだろ？
では、ついついた一的に云つと・・・

エヴァログハウスなう！

拓也

「ふああア・・・まだ6時かよオ・・・
しようがない「ラストストーリー」でもやつとくかア・・・

みんなはまだ就寝中のよオだからなア・・・
何故分かるかつてエ？
それはな・・・

みんなで川の字+一画じてるぜエー！

・・・〇・

さてと・・・今どこだっけ・・・
おおう！？ザングルグ終わったンだつた・・・

エンディングじゃねエンだなア・・・まだ・・・
(ネタバレ) が真のラスボスかよ！！
えエ・・・エルザ可愛そつじyan・・・

と、そんなこんなで7:00になつたぜエ
途中からチャチャゼロと一緒に「モンハン」だつたぜエ
さて・・・と茶々丸は起床、ユウナも起床、エヴァも・・・あれ?
起きてねエ・・・
兎に角起こしにいくかア・・・

拓也

「おイ！エヴァ起きやがれエ！朝だぞオ！・・・
エ・ヴァ！オ・キ・ヤ・ガ・レ！・・・
はア・・・もオいいわア・・・限界・・・

出てこい！お玉にフライパン！……
秘技！「地獄の目覚まし」！……「

「グアアアアーン！グアアアアーン！ガーン！ガーン！-

エヴァ

「五月蠅いわ！！人が折角気持ちよく寝てるモノをー！
今何時だと思ってるんだー！」

拓也

「え？ 7：00だぞ？」

エヴァ

「・・・まじか？」

拓也

「マジだ」

エヴァ

「・・・・まあいい今日休む

拓也

「ガキかア？ 600也」

「バキ！-

拓也

「何しやがるんだよオ！-」

エヴァ

「女にはな・・・女には年の話をしあや駄目と親に教えられなかつたのか！？」

拓也

「・・・スマン親いねエ」

エヴァ

「・・・」

拓也

「・・・まあ気にすンなや・・・
早く行こうオ飯の時間だぜエ」

エヴァ

「ああ・・・」

エヴァ 視点

悪いことをしてしまつたな・・・
アイツは気にするなと言つていたが・・・
アイツもまだ16なんだな・・・

それに親がいないとなるとな・・・私でさえ親は吸血鬼化するまで
はいたからな
はあ・・・

拓也視点

拓也

「ン? ナー黙つてンですかア?
気にするなつつただろオガア・・・
これ以上気にしたらシカトすつかンなア」

エヴァ

「お前はガキか・・・ククツそつだな・・・
私らしくも無かつた・・・さて、今日はは皆で遊ばないか?
学校さぼつてな」

拓也

「俺は良いけど、ユウナはビリすンだろオな」

ユウナ

「休むぞ・・・最近疲れてるし」

・・・この家にはさほど魔しかいねエ
はア・・・疲れるぜH・・・ちょっと楽しいがなア
さて・・・と

拓也

「なら俺から電話かけよオカア?
自分からかけたら仮病過ぎる」

ユウナ

「・・・でも、家の担任さ・・・」

エヴァ

「タカミチだぞ?」

拓也

「いやア・・・俺セアこの前・・・
つつても・うざい予感~・位だけどなア
新田さんに電話番号教えてもらつたぜエ」

ユウナ

「え・・・・」

エヴァ

「・・・ナニをしたんだ?」

拓也

「唯、ナンパされてたのを助けた所を見られただけだがなア」

ユウナ

「「」のフラグメイカーめ・・・またどうせフラグ建てたんだりつよ・・・」

エヴァ

「・・・哀川属性とでもよぼつか・・・」

拓也

「おイおイ変なコトいわねエでくれ・・・
俺は当麻じやねエアケセロロータ・・・一方幼女でもねエ・・・」

ユウナ・エヴァ

「・・・」

おイ・・・まじでなンだよオ・・・
俺なんンかワリイコトしたかア?
まア・・・先に電話かけるとすつかア

新田

『お、拓也君だつたか』

拓也

「はイ・・・今日、ユウナと友達のエヴァちゃんが体調悪いらしき
ので休ませていただいて
よろしいでしょうかア?』

新田

『分かった・・・お大事にとだけ伝えておいてくれ』

拓也

「スマミン」

一ガチャ プーブーブー

拓也

「電話かけといたぞオ」

ユウナ

「・・・セングー」

エヴァ

「すまんな・・・」

何故か分からねエガ・・・」の無言はキツいぜH

とう一 びー こんてにゅー

アクセロワー タじゅ ねエエーー（後書き）

今日は次話への繋ぎなのでかなり短いですw
次回の更新を頑張りたいです！！
でわ、次回「モンハンはやっぱ一人じゃ寂しいよね
よろしくお願ひします！！

モンハンはやつぱり一人じゃ寂しこもね（前書き）

おっしゃ～やつと完成だ～
W

モンハンはやっぱり一人じゃ寂しいよね

拓也視点

拓也

「ンじゃ、ナースンだア？」

エヴァ

「・・・ククッ・・・その前に家の近くの大掃除をしようか」

ユウナ

「・・・懲りずにまあ・・・」

ミサカ

「呆れを通り越して関心しますね。ヒミサカは心底バカにします」

「・・・別に気付かなかつた訳じゃねエンだからな！
さて、いらねエツンデレは止めて・・・」

拓也

「・・・折角休みとつたのによオ・・・
まア、リアルジャギイ狩りでもすつかア・・・」

エヴァ

「・・・お前・・・遠回しに雑魚つて言つてないか・・・」

ユウナ

「でもさ・・・私たちの戦力みてみ？」

最強の魔法使い、最強の能力者、最強レベルの電撃使い、異能力

無効化者

しかも、相手が魔法使いだからな・・・
イビル4頭相手にレザー一式みたいなレベルだぞ？」

ミサカ

「最強レベルではなく最強です。とミサカは胸を張ります」

エヴァ

「オーバーキルどころじゃないな・・・」

今思えばそつなんだよなア・・・

俺・・・最強を自負してるレベルだろ・・・

エヴァは封印とかれてるからや、ヴァイレベルだよな・・・

因みにレベルじゃなくて、レヴェルな？

ンでだ、ミサカ・・・アイツは御坂美琴を超えてやがるからなア・・・

そして、対異能使い最強のユウナ・・・アイツの幻想殺しの前では

何の異能も通じないからなア

しかも、相手がいいヤツなら助けちまうしなア・・・

まア、ソコがイイトコでもあんだけどなア・・・

拓也

「取り敢えず始めるかア・・・3」

ユウナ・ミサカ

「・・・2」

エヴァ

「・・・1」

拓也

「レツツ！パリーー！」

-ガチヤン-

もうバカでイイかめんどくさい視点

バカA

「さあ！正義の鉄槌を！！」

バカ共

「鉄槌を！！！」

真名

「嫌だな・・・この仕事・・・
相手が最強とはまるでトリガーハッピーと一緒に仕事をするみた
いだ」

刹那

「例えが分からんのだが・・・
まあ確かに嫌な感じがするな・・・」

バカA

「ナニを言つているウ？」

バカB

「そうだ私たちに敵は無いのだ！！」

バカC

「そ」

- ブシヤアアア -

？
「なんだア？」

バカA

「なに！？」

エヴァ

「魔法使わなくとも良くないか？」

ユウナ

「まあ・・・対魔法壁もあつからな」

？

「自分で言つかア・・・」

ミサカ

「私の台詞があ。ヒミサカは悲しんでみます」

？

「そんなこと自分でいうかア？」

ユウナ

「拓也はそんなことを言いながら殴るの止めないな」

拓也？

「君が泣くまで殴るのをオオ止めないイイイーーー！」

エヴァ

「ジョジョネタに走るなバカモノ

ミサカ

「まずアナタも殴るのを止めましょー。と!!ミサカは電撃を放ちながら言います」

ユウナ

「・・・・はあ」

バカB

「そう言つなら君も殴るのを止めやーーー！」

刹那・真名

「嫌な予感はこれか・・・」

拓也視點

拓也

「抵抗するなア・・・抵抗しないヤツは助けるぜエ」

真名

「隆參あるべく」

刹那

「真名ツ・・・私も降参する・・・お嬢様を守れなくなるのは嫌だからな」「

バ
力
A

「貴様らツツツツツツツツツツツツ！」

拓也

「ハイお前アウトオーッ、俺に仕掛けんなつたろオーッ、じゃア

ユウナ

「はあい皆さん田つぶるつ」

ミサカ

「今回電撃放つただけでした。とミサカはちょっと愚痴つて見ます」

ユウナ

「あはは・・・私はそげぶしかしてなかつたからな・・・」

拓也

「天まで届けエバカAクンよオオオオオオ!」

バカA

「バ・ケ・・モ・・・ノ・・・」

真名・刹那

「(睡然)」

バカの集い

「・・・・・・・・(汗(よかつた)降参して)」

拓也

「前も言つたよオに俺らに関わるンじやねエ・・・・関わつたらよオ・
・死のみだゼエ
いいなア?・・・・よし帰つてモンハンすつぞオ」

真名

「・・・・」

刹那

「確かにな・・・」

ユウナ

「呆れんだろう？ 真名に刹那」

真名

「そう言えば君も向こういつ側だつたね」

刹那

「どうこうことだ？」

ユウナ

「仲間なんだよ・・・相棒だしな」

とうへ びへ こんてにゅへ

モンハンはやっぱり一人じゃ寂しいよね（後書き）

さて、低クオリティでしたが、次回も頑張ります
軽くスランプですがw
では次回「TVゲームしようぜ！！」
よろしくお願いしますね！！
因みに駄猫は色々なトコ（サイト）にいたりしますw

いみな作品を見てくださいこましほあつがヒツイゼニコマ

b 二十六夜咲夜(前書)

昨日ストックがパアになつちまこまして・・・

まあ、昨日するはずだつた祝50000円&9500ゴードーク話

何時の間にかこんなになつてしまひつくりです

皆さんこれからもネギまー?戦記よろしくお願ひします

「んな作品を見てくださいましてありがとうございます b y十六夜咲夜

ミサカ視点

おはようござります。ここにちは。こんばんわ。

ミサカです。拓也とユウナとヒガアとチャチャゼロがゲームをしていて

・・・・・ほ、ほつちなんかじやないんだからね！！
ンンー今のは無かつたことにしてください。

さすがに心の中でミサカは（「ソは言いませんよ？

さて、ずっと前に人物紹介云々をすると言っていたのですが、
中々するタイミングが無かつたので口口ですることにしたいと思います。

まず主人公の拓也

フルネームは「哀川 拓也」

容姿は一方通行（アニメ一期）能力は「一方通行改（レベル60×

e-r）」

私たちのパーティでは最強ですね。

物理攻撃、魔法攻撃、超能力すべて反射できますしね。

次にユウナ

フルネームは「ユウナ・スプリングフィールド」

容姿はけふフラーのナツルを黒髪にして、幼くした感じですね。

能力は「幻想殺し改（回復魔法などだけを殺さないよう）」（都合主義）」と

「前兆の感知」という能力から派生する余波を察知・判断して防御や回避を合わ

せたり相手の隙を見い出すといつ軽くチートな能力です。

最後に私ミサカです。

正式名称は「神の加護を受けし”モノ”」といつ厨二な名前なのでミサカで良いです。

容姿はミサカの眼が紅版ですね。能力は「超電磁砲改（レベル50 ver.）」と

ネタバレになりますが紅の雷翼という翼を出します。

後、今の勢力は

味方

エヴァパーテイ、拓也パーテイ

敵

正義バカ共

中立

生徒達

戦力で言つと、敵を1とすると味方は53300000ですね。

さて皆はまだモンハンしていますしどうしようか・・・

黙猫視点

咲夜

「ご機嫌よう

これは本編であり本編でないモノガタリなので私が出ています
さて、この小説は500000PV9500コニークに到達いたしました

と言つことで今までたまつていたお礼を言おうとこう枠です

黙猫

「と言うわけで”お礼を言つ枠”始まります
え？ミサカさんはつて？あの娘は前半戦の司令です
まず、Accelerator様感想ありがとうございました！
次に、リヨウタ様ありがとうございました！
その次、ネク様ありがとうございました！
ラストオオ！ロア様ありがとうございました！
それから、このモノガタリを読んでいただいてる皆さん本当にあ
りがとうございます

これからもよろしくお願ひします！－

咲夜

「アンケートは一年の魔帆良祭までです

どんなアンケートかと言うのは、原作主人公「ネギ・スプリング
フィールド」を

- 1・原作通り出す・・・（完全アンチ）
- 2・出番をなくす・・・（死んだかどうかは・・・）
- 3・ひょーいさせる・・・（所謂・・・転生憑依）

因みに駄猫は転生憑依というのは死んだ三次元の人間が欲望にま
みれて

主人公になりたいと言つて憑依して生き返ることと思つています
わ

駄猫

「ついでに今僕は野菜にセイバーを召喚させて・・・
ルール・・・ゲフン！まあ仲間にするというルートを考えてあり
ます

この場合は野菜はワカメと同じようなキャラになります・・・
UBWルートの慢心王を持った状態みたいなつW

咲夜

「あと、ゲス勘違い転生者も出そつか検討中らしいですわ
ワカメ野菜の「ゲス勘違い転生者」どちらがですね」

駄猫

「ワカメを知らない人のために
F a t e の間桐シンジで調べて見てください
まあ予定はどちらかは出すコトになつており・・・
拓也がユウナを（ネタバレ）されて切れた拓也が（ネタバレ）を
(ネタバレ)する
という感じです

因みに拓也君成長しました能力的に

筋力：B 耐久：B

敏捷：A 魔力：×

幸運：A 宝具：EX です

元の能力値は「切れないですよ・・・哀川くん」で出ています

咲夜

「これで中編を終わります」

駄女神視点

駄女神

「私かい！――あと駄女神じゃないです！――」

- しらべ -

ええええええええええええええ！？

理不尽です！

私は女神こと「セラフィム」です・・・

畜生！天界中パフェで埋め尽くしてやる！――

すいません関係ありませんでしたね
え？ 休み時間だから私にバス？
ふざけるなああああああああああああ！！

ミサカ視点

あ、私に戻つてきましたね。
因みに茶々丸が帰つてきました。
一緒にお茶を飲みながら観戦しています・・・「パワプロ」を

拓也

「いけエークロキッバサ！！」

エヴァ

「打ち返して・・・なん・・・だと・・・」

拓也

「俺のオリ変世界一イ！！」

ユウナ

「まさかのストレート並みのナックルとは思わなかつたぞ・・・
しかも変化が大きい」

チャチャゼロ

「ケケケ、スゲエナオイ」

貴方たちは餓鬼ですか・・・

まあ楽しんでるなら良いのでしょうか・・・良いんですね?

いろんな作品を見てくださいましてあつがどうぞります b y十六夜咲夜（後書き）

今、書いていた桜才戦記修復なうです・・・

さて・・・次回は「哀川くんの学校戦記」

魔帆良祭まで結構力ツトしますよ～

では次回もよろしくおねがいします！ Bis bald！

期末赤点取っちゃったけど成績ではセーフでしたw

ふうセフセフ w

また見てね～

（・A・）ノシ

拓也視点

はいじオ もオ 哀川でエす

今学校に来てるなう

え？ 何で学校に来てるかつてエ？

ユウナとミサカが弁当置きやがつて行つてなア・・・

メンドクセエ・・・

まずクラス知らねエしよオ・・・メンドクセエ・・・

1-Aとは言つてやがつたンだが・・・まず女子中入るのがしんど
いぜエ・・・

特に顔が悪人面だかんなア・・・チンピラと勘違いされそうだなア・

・ よくあることだがなア・・・微妙に傷つくからなア・・・

はア・・・さて、いくかア・・・

ユウナ 視点

ユウナ

「あ・・・飯忘れた・・・」

ミサカ

「忘れてしました・・・。とミサカは自分のミスを呪じます」

千雨

「おいおい・・・私の食べるか?」

ユウナ

「いいよ・・・多分拓也が持つてくれれるから」

千雨

「拓也?・・・・お前一アイツの知り合いか!?」

ユウナ

「あ、ああ・・・それがどうかしたか?」

千雨

「アイツ、あの後一回も来なかつたんだよ!...」

ミサカ

「何処にですか?とミサカは訪ねます

千雨
「私の部屋」

へえ・・・アイツまたやりやがったのか
お仕置きかな?

ウフフフフフフフ

千雨

「何で黒いオーラ出してるのか知らないが、答えを聞いてもらひだ
けだぞ?」

ユウナ

「答え・・・へえ・・・やはり・・・
ブ・チ・口・口・シ・か・く・て・い・ね!」

千雨

「(ガタガタガタ) おい・・・黒いぞ・・・

ガラガラ

拓也

「失礼すンゼン・・・上条シン・ユウナ・スプリングフィールドは
いるかア?」

拓也視点

ユウナ

「・・・・・ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね!」

?むぎのンかア?

むぎのんとは

この世界で知り合ったアンチ正義の魔法使い仲間です。
とは言つても転生者ではありませんよ?超ありえません

因みに本名は「麦野沈利」

仲間がいて、それぞれの名前が

「絹旗最愛」

超超言う子です。魔帆良中学（正式名称は麻帆良学園本校女子中等学校）の一年生です。

「フレンダ＝セイヴェルン」

普通に外国の子です。魔帆良中学の一年生です。

「滝壺理后」

・・・駄猫好みです。魔帆良中学の三年生です。

そのむぎのンの口癖が「ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

なんだが・・・

何故知つてるンだア?

拓也

「失礼すンゼン・・・上条ンンー・ユウナ・スプリングフィールドは
いるかア?」

ミサカ

「お弁当ありがとうございます。ヒサカは自分の名前でないのを少しすねながらお礼を言います」

?

「ラブ臭がッ！」

?

「ハゼーです」

拓也

「ナニ？」のカオス・・・」

ユウナ

「ククク・・・たアくやクウウウウン！またテメエフラグ建てやがったな！？」

拓也

「俺にはナニが何だかわからねエンだがア！？」

千雨

「あん時の答えでコイツがなんか先走ったんだよ」

拓也

「ヘエ・・・あん時の答えでたンだア・・・ンじやあ・・・後でいくわア・・・」

さアてさて・・・

どンな答えが出たンだろオカア・・・

ユウナ

「どうこうことだ?」

拓也

「ヒントはこれだ

- 1.俺たちの世界
- 2.ギャング口
- 3.約束

これで分かん違うオ?」

ユウナ

「・・・・・へえ・・・・

ミサカ

「モキュモキュ」

拓也

「ヤベヒ・・・・・カアイイ!・!・!

ユウナ

「おー!/?拓也キャラ崩れてんぞ!/?」

・・・とうへ びへ こんでこゆへ

最近・・・最近って言われる・・・

拓也

「お前の通常モード・・・・・・・・・・・・・・

チゲヨー！

僕はまあ誰ちよつと少しだけ虜めるのが好きなだけだよー。かわいが

拓也

「おこおこ・・・

拓也視点

どうもオ・・・前回モキュモキュでキャラ崩れしまくった拓也だ
ンソ一では改めおはシンパンちわア
この挨拶はいつでも対応出来るつて言つスゲエモンなンだぜH

わて・・・と

暇な時間飛ばしー放課後ついでに結果だけを残すーー

拓也

「おイ・・・千雨は未だかア?」

コウナ

「つこわつも終わつたばつかだしなあ」

ミサカ

「拓也はガキなのですか?とミサカは純粋に訪ねます」

拓也

「じわらかとこりと黒いな・・・」

・□・□・

千雨

「おじやまします」

拓也

「おー待つてたせー!」

コウナ

「ガキみたいにワクワクしてたぞ

拓也

「こひね□アハハハ」

千雨

「まづ答えからだ・・・」

-回想-

あの後電話をしていたんだ

拓也

「仲間になるなら超能力か魔法のどちらかを手に入れてもいい」

千雨

「超能力?」

拓也

「あア・・・

学園都市において研究されている、物理法則を捻じ曲げて超常現象を起こす力だ

自分がけの現実と呼ばれるミクロな世界を操る能力を土台として

おり、

「起じりえない」ことを「起じる」と思い込むことで超常現象の実現に結びつけるんだ

学園都市の『開発術』が確立されたことで人為的に習得する」とが可能になつたンだが、

それ以前から「天然で能力を発現させた者」である『原石』が存在する

また、『原石』という「才能ある人間と対等になる為の技術」として『魔術』が生み出されている

これを使用する者は超能力者と呼ばれそつだが総称は『能力者』つつウンだ」

千雨

「・・・・なるほどな」

拓也

「魔法つつウのは

灯りを点ける、手を触れずに物を動かすといった魔術から、戦いのための魔術まで多種の魔術や

魔術の品物が登場する。古今東西の実存する魔術体系を背景として利用しているンだ、大きな区分として

しては、西洋魔術、東洋呪術などがあるンだ

千雨

「ふむ」

拓也

「ンでだア

西洋魔術ではラテン語または古典ギリシャ語の呪文が唱えられるンだが

ラテン語と古典ギリシャ語では、後者の方が上位の魔術であるとされるンだ

呪文を唱える前に「始動キー」という、

言葉としては意味を持たないパスワードのよつなものを唱えるが、簡単な魔法では修練次第で省略できる。術者により始動キーは異なるんだ

千雨

「詳しいな・・・

拓也

「情報は武器だからなア」

千雨

「言い得て妙だな・・・」

拓也

「つつウ訳だ答えは今度な
・回想終了・

千雨

「超能力だ」

拓也

「いいのかア？」

千雨

「べ、別にお前と一緒に良いなんて思つて無いんだからなー！」

ユウナ

「あついかわクウウウンー・ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・
ね！」

ミサカ

「やめといたほうが・・・。ヒサカは答えます」

拓也

「はア・・・取り敢えず
脳開発すンぞオ」

千雨

「・・・どうしてだ？」

拓也

「簡単に言つたら演算能力を上げるハコヒトだア」

千雨

「なるほど」

拓也

「んじやあ・・・」

・ポン・

千雨

「・・・なんだこれ・・・数式が・・・・」

拓也

「ちつと黙つてくれンねエか?結構複雑なンでなア」

千雨

「・・・・」

・・・とうへ

び

こんてにゅ〜

・・・夏木みایイイイ!!!!!!!!!!

まだまだ来ないのですよ・・・・夏休み・・・・

拓也視点

さア・・・拓也だぜH

ココで一つ面白い話をしてやるぜH・・・

千雨の能力・・・何だと思う?
まア・・・選択させてやる

1・大嘘憑き

まアコレは某めだか箱の括弧付きで話す男の能力だなア

2・境界を操る程度の能力

コレは某幻想の世界の賢者の能力だなア

3・未元物質

ていとくんの能力だぜH

さアどれだア?

正解は・・・

2の境界を操る能力だ・・・

どオ思う? やばくねエかア? 僕でさえ簡単にまけちまつザヒ・・・
いつちゃん天敵な能力だしなア・・・
能力者からしたらよオ・・・ だつて境界弄つて能力使えなくせら
れたらよオ・・・

千雨

「・・・ なんで・・・ 隙間BBAの能力なんだよッ! - - -

拓也

「俺に聞くんじゃねエ! - - - - -

ユウナ

「うわ〜・・・ 引く程強い能力だ〜・・・

ミサカ

「・・・ 能力者からしたら泣きそうな能力ですね。 とミサカはちょ
つと弱気になつてみます」

ユウナからしたらそんなでもねエよなア・・・
どちらかといふと殺しそうだな・・・
幻想的な意味で

あア・・・ 一つお知らせがあるンだゼエ

前々回で紹介した・・・むぎのソはもオでねエゼ

拓也

「ならわ」・・・ちよつと弄くつてみるよ・・・境界」

千
雨

一分か二分たる。・・・・せうてみる。」

招也

…・…・…隠間ではね二たび…・…・…

- ギイイイイイイイイイイ -

拓也

「ガハツ・・・・」

ユウナ

拓也

—コレは人間が持つてて良い能力じゃねエ・・・
一瞬で暴走しそうになつて・・・ンで抗つたら頭痛がなア・・・「

千雨

「もう……何もこ

ミサカ

「それ以上はマリヤてしまつので。マリヤサカは死亡フラグを回避せます」

千雨

「つぐ・・・私としたことが・・・テンションがあがつすぎたか・・・」

・

拓也

「・・・お前・・・キャラ崩れまくつてんぞオ?」

ユウナ

「まあそこいら辺は駄猫の所為だし」

・バス・

拓也

「どつから矢が飛んできたンよー?」

ミサカ

「なになに・・・メタ禁・・・」
「これだけですか?」
ミサカは破り捨

・

・バス・

千雨

「・・・あたしがどんのか?」の矢・・・次当たるフラグ建つぞ?」

拓也

「残されてオチを作りされるか、今逝くかどつちが良い?」

千雨

「・・・よし!いくぜえ!」

なになに・・・破るな・・・
千雨・・・逝つきまーす！」

-バス-

拓也

「・・・落とすのメンディなア・・・
いつのこと適当に挨拶して終わりでもいいしなア・・・
でも今回で学校編終了だしなア・・・
ここは・・・

漢は度胸！-！-

えエヒ・・・後ろを振り向いてみ？・・・

なンだア？コレ・・・

-フイ-

紫

「誰がババアですって？」

拓也

「・・・ギャアアアアアアー！？」

やつと次回から話しが進みますw

どうでしたでせうか？

因みに、あの三つで能力どれにするか迷っていましたが、

結界が効かないと言つたとかで、BBAの能力を

紫

「だあれがババアですつて？」

・・・アナタです！

紫

「（ブチツ）え？聞こえなかつたですわ・・・
なんと言いましたの？」

え？アンタがババアって

紫

「スキマツアーヘーあんなーい！」

ンギヤアアア！？

しかし・・・我が生涯に一片の悔い・・・あり！

拓也

「あるんじゅねエか・・・

まあ、いいやア・・・

次回魔帆良際準備編！

もう一つの世界では9月に近づいた

「…………」

紫

「拓也くんもう帰つてきましたの・・・
なりもつ一度・・・レッジスキマシアーー！」

拓也

「へ？？？ってンギャアアアアーー？」

お片付けお片付けエー！！

拓也視点

さアて・・・最近色々な世界・・・コレはメタカア
俺は・・・普通の人間には興味がねエ・・・この中に
宇宙人、未来人、異世界人、超能力者が居るなら俺ントコに氣やが
れエ！

・・・って言つてもよオ・・・

宇宙人、未来人＝超

異世界人＝俺たち

超能力者＝俺たちっていう涼宮さんもビックリのパーティだなア・・・

てなわけで、どうもオ哀川拓也だア

へろるオン

最近の俺の流行はひぐらしだぜエ・・・
特に圭一がカツケエと思うンだがよオ
みんなはどうだア？最初の時は微妙だけどなア・・・

拓也

「と言つわけで俺は魔帆良中学校に連れてこられたとぞ」

千雨

「どうしたんだ？一体・・・」

ユウナ

「ああ、コイツ時々こいつのあるから」

ミサカ

「電波ですね、分かります。ヒサカは頭を心配します」

拓也

「分かるんならよオ・・・・・頭を心配すンじゃねエよ・・・・・
しかも疲れた・・・・俺運動できねエしよオ・・・・・」

ヒサカ

「どの口が言つただよ・・・・・
この何しても出来る天才馬鹿め・・・・・」

ミサカ

「基本拓也は何でも出来ますよな。ヒサカは普段はマダラなこと
をかくし」

拓也

「俺ア長谷川さんじやねエ!!
もオそろそろ切れるだオ?メンドクセエのに来てやつたんだから
よオ・・・・」

ただいま部屋の飾り付けを作るのを手伝いながら、黙弁つてます

まア・・・・しんどいねエ・・・・
早く寝たいんだ・・・・昨日きちんと寝れなかつたしよオ・・・・
ンでやア・・・・前回ひとつ週間進ンでるぜエ・・・・

千雨

「長谷川って私しか居ないじやねえか!」

拓也

「オマエはマジで駄目な男じやアねエだろオがよオ・・・・・」

千雨

「まあ、私は女だしな・・・」

コウナ

「マダラは銀 の長谷川さんだよ」

ミサカ

「そういうえば、拓也のしゃべり方どいつもかならないんでですか? とミサカは意味のないことを聞きます」

拓也

「設定上ムリだなア・・・」

コウナ・千雨

「設定言つなー。」

拓也

「それにしても・・・終わらね・・・」

コウナ

「嘘なにしてんのかな?」

拓也

「うと見てくるが」

結果・・・拓也 が キレ ました 。

さて、一部始終をどうぞ

和美

「きたあの白いヒト彼氏なのかな？」

ハルナ

「むふふラブ臭が・・・」

- ガラガラ -

拓也

「・・・おイ・・・コツチはさア
せつかくの休みをテメエらの手伝いに来たんだよオ・・・
なのによオ・・・・テメエら・・・
ならよオ・・・・テメエらの俺たちに任せせるつていう・・・
まづは、そのふざけた幻想をぶち殺す……ツ！」

超鈴音

「・・・君の瞳に困憊ネ 」

拓也

「ざナソなやア！！」

トウヘ ビヘ ロンテーロヘ

お手付けお片付けH-!- (後書き)

もつすぐ魔帆良際 (1年目) . . .

夏休み中にちつとやります-!-.

合宿合宿ウ・・・あ、違つた圧縮圧縮ウ！

拓也視点

はろオ！最近胃薬と友達な俺！拓也だぜH
さて、前話から一日経つたぜH・・・今日はなにもねH 唯の休日だ
から

恋姫をやううと思つてゐるンだが・・・
下の部屋に

エヴァ、茶々丸、ユウナ、千雨、ミサカ・・・

ムリだア・・・
と言つわけで・・・

俺は危険を顧みず・・・
ヘッドホンをつけるぜH・・・！

騒がさなければ行けるはずだア

いや、ムリカア・・・
さて、どうしたもンかねエ・・・
別にナ一をするつて訳でもねエンだがよオ・・・
アレなシーン見られるのだけは勘弁だからなア・・・
ここは・・・アキバに行くかア・・・

と並のわけでもないやつをしたAKB
まあ、今の言葉に理由はないんで適当に流してくれやア・・・
わて・・・わたはいいいんだがよオ・・・パソコン喫茶行くのがメン
ズくなつちまたんで
回り回りとするわア・・・

最初はと のあな・・・取り敢えずゲームを揃えたいと想つ

紫少女

「こなちやん・・・むやこよ~」

「なちやん?」

「『メン』『メン』-取り敢えずア- 一 バト」

・ デン・

「ななちゃん？」

「あ、すこせん」

チンピラ▲

「ああー? 可処みでやがんだ?」

紫少女▼

「あうあう・・・」

拓也
「あらよつとオ・・・すみませンねエ・・・
るじ、チンピラぶつ飛ばすかア・・・

と、思つてたナビメオ・・・
れじ、チンピラぶつ飛ばすかア・・・

俺の連れがよオ・・・はやく来やがれ

こななちゃん?

「来てくれたんだ!」

拓也

(あへ、どうすつかア・・・潰す?よしー相手が何かしてきたりそ
うじゆう)

チンピラ▲

「腕おれちまつたんでなあ・・・感謝料よこしゃがれ・・・

「ななちゃん?」

「あ、すこせん」

殴られたくなかったらなー！」

拓也

「殴ればア？ テメエの力なソぞよオ痒くもねエゼ？」

こなちやん？

「え？ 君なにいってるの？」

拓也

「黙つてろ・・・（ボソ）

早くしやがれエ・・・メンドクセエからよオ・・・

チンピラ▲

「なめてんじやねえぞ！ ！」

・バキ・

拓也

「氣イすンだかア？」

チンピラ▲

「まだだぜーー！」

こなちやん？

「えつ？ ちょつーー？」

・スッ・

拓也

「正当防衛だよなア？」

バキッ・・・・ズザツ・

チンピラ▲

「ぐはつ・・・・・・・・

拓也

「あり？やりすぎたかア？」

・・・まあいいか・・・・ンでそっちの青いの大丈夫かア？」

こなた

「私は泉こなたって言つんだけど・・・何で殴られたの？」

拓也

「ン・・・・其処で引いたらOKだつたし、引かなかつたら正当防衛で合法で殴れるからなア」

紫少女Ｋ

「こなたから離れろお！…」

ガス

拓也

「ン！」ぱアツー！？」

紫少女K

「大丈夫こなた！？」

こなた

「・・・その人私の恩人だよ・・・？」

拓也

「り、理不尽だア・・・」

かがみ

「どうもーすみませんでしたー！」

拓也

「いや・・・唯チンピラより痛かったとだけ言っておくことにする
ゼエ・・・
ンで、今何時だア？」

つかさ

「えーと・・・午後3時です」

拓也

「ちくせう・・・不幸だア・・・
最初からどらの な行こうとかアニメイ 行こうとか考へない方
がよかつたな・・・」

こなた

「あゝものは相談なんだけど・・・案内しようか?」

拓也

「マジで!? センキュー! 大好きだア コンチクショーハ!」

かがみ
「てい!」

・バヌツ・

拓也

「つは!?俺は何をしていたンだア?」

こなた

「ノリで大好きだコンチクショーハ! っていつてたよ! / / /

拓也

「不快な思いさせてスマン・・・
ンで、案内よろしく頼むぜエ・・・」 どらの地理全然ねエからよ
オ・・・」

こなた

「そななの?・・・今何処に住んでるの?」

拓也

「魔帆良学園都市だぜ！」

こなた

「・・・ちうたんしつてる？」

拓也

「・・・じつてるひつウカ・・・・・」

かがみ

「つうか？」

拓也

「一緒に住んでる兀」

こなた・かがみ・つかさ

「・・・・え？」「

拓也

「別に同棲とかじやねエからなア・・・・
家の部屋の一室を貸してるだけだからなア・・・・」

さて、AKBを回ったんだが殆ど欲しいモノは無く
その代わり面白いモノを見つけた・・・コレだ

PSP版恋姫・・・全種類だぜ！

帰つてプレーしようとしてたんだが・・・
こなた達に引き留められた・・・メアドと連絡先とネトゲ内の名前
だそうだ・・・
今度連絡しろってことだよなア・・・まあいいかア・・・

これがアイツらに知れたら・・・はア・・・

合宿合宿……あ、違った圧縮圧縮！（後書き）

さて……こいつの間にか総合評価が軽く前作を超えたネギま！？
戦記

スランプに陥りしあどいですが……これからも一生懸命頑張りますので

よろしくお願ひします！では！

直ぐに呼びましょ万屋さん（前書き）

今日はちょっと短いですが進行に関係あるのでかかせていただきます

直ぐに呼び出しそう万屋さん

拓也視点

はいじオもオ・・・万屋たくちやンだぜH・・・
まア、ジャ プ見てたからつて訳じやなく、マジで万屋なンだがなア
さて、金は某銀さんが田を\$にしながら追つてきそなレベルだなア
さて、・・・魔帆良際なンだがよオ・・・
俺は何故かサイドポニテがよつてきてめんどくせH・・・
しかも後ろには・・・

俺の好みの・・・あア・・・ロリコンになるなア・・・
てかあの体型はロリではねエなア・・・
なら、おくかと聞かれたら多分ギリギリアウトだろオがなア

刹那

「哀川さん・・・すみませんがお嬢様の護衛を頼めませんか?」

・・・え?マジで?喧嘩売つてきたンじやねエの?

拓也

「万屋への依頼で良いんだよなア?」

刹那

「ええ」

真名

「貴方も金で動くんだな」

拓也

「コレが仕事なモンでねエ・・・
一応この仕事に誇りも持つてゐるしなア・・・」

真名
「そつかい」

拓也
「そりなんだぜエ」

刹那
「お金は何時?」

拓也

「まあ、俺の仕事の働きの良さにあわせて・・・
つつつてもテメエ達学生だしなア・・・
缶コーヒーでいいぜエ・・・破格だろオ?」

刹那・真名

「つへ?」

拓也

「ンじやテメエ達は〜〜万とか払えンのかア?
ムリっしょ?なら俺の心遣いに甘えときやがれエ」

刹那

「わ、わかりました」

拓也

「ンで、仕事する際に事情を説明してもういいエンだがよオ・・・
何故俺に依頼したア?」

刹那

「いえ、学園長に口中も徘徊たの」

拓也

「学園長殺してぐるなア」

真名

「・・・お金貰つてゐるから何も言えないとだよ」

拓也

「いや、あからさまに労働基準法破つてゐるし・・・

あれ」生きる害虫じやねエかよオ」

真名

「あれでもお密さんだしね」

拓也

「傭兵つづかのは辛いねエ」

真名

「貴方も同じようなモノだらつ」

拓也

「俺アどじりかといつて護衛つぱこのついでだしなア」

真名

「へえ、貴方も刹那と同じで護衛をしているのか」

拓也

「へえ、貴方も刹那と同じで護衛をしているのか」

「・・・護衛つてのはどオなんだろオカ・・・ま、微妙なとこだ
なア

取り敢えずオッケーだ・・・」

直ぐに呼びましょ万屋さん（後書き）

次回護衛対象は大和撫子！？

では次回もよろしくお願ひしますねw

では

ちつとした外伝 第一話 哀川君は聖杯戦争で勝ち抜けるのか？

・・・ンー・・・

記憶が何個もあるなア・・・

魔帆良つつウとこではミサカつて言うのがいたなア・・・

優奈もなんか英雄の娘になつてたなア・・・

・・・俺が大神とかつてのもあつたなア・・・

死ンじまつた今は全てがなつかしイわア・・・

まア、やりたいことは全部できたしなア・・・やりたいこと・・・

あ！？変な声が聞こえたからこいつなつてやがンのかア！！

・・・やつちまつたことはしょ「がねエ・・・

と、言いたいンだが・・・この引力はなんなんですかア！？

拓也

「ンギヤアアアアアアアー！？」

「バキバキバキ」

拓也

「痛エ・・・」

「バン！」

凜

「セイバー・・・じゃないわよね・・・・って拓也ーーー？」

拓也

「・・・凜さん何してンですかアア？」

凜

「いえ、私は何故かまたこここの世界に来てしまったようなのよ・・・で、此処に来たのも何かの縁だと思ってまた聖杯戦争に参加しうと思つたの」

拓也

「・・・アーチャーが召喚されんじゃねエの？」

凜

「さて、何故かしら・・・・？」
「まあ、また貴方と暮らせるなら幸せよ・・・・フフ・・・・私らしくもないわね」

拓也

「・・・色々はずいぞオ・・・・//」

凜

「クスクス」

拓也

「ンで、聖杯戦争・・・やンのかア?」

ステータス的に行けンじやねエかア?」

凜

「拓也のコトだから英靈?なにそれおいしいの状態でしょ?」

拓也

「ンー・・・と、オール引つたらどうする?」

凜

「・・・アハハ嘘よ?」

拓也

「・・・まあいいわ・・・」

凜

「・・・ンで、じつする?」

拓也

「・・・ンで、じつする?」

凜

「そうね・・・取り敢えず街を案内するわ

拓也

「・・・そオすつかア・・・」

・冬木の町並みを見る」との出来るジルの屋上・

拓也

稟

「あ、そう言えばそうだったわね」

招也

凜

なんとかんたして見えるのね」

拓也

稟

「さて・・・・・今からだれつかり・・・・
つて、そう言えばアナタのほうが最速といったらふさわしいわよ
・・・・」

拓也

「・・・俺は最狂を名乗つたりしてるんだが、今クラス名見たら『

英雄』

俺はあれか？あのオ・・・ヒーローなんて名乗つてはいませんが
？当麻なら分かるんだが

凜

「アンタにすぐわれた人も沢山いるからね・・・・

拓也

「・・・まあいいかア・・・・
ンじやア・・・軽一く・・・・聖杯破壊しますかねエ」

ちつとした外伝 第一話 哀川君は聖杯戦争で勝ち抜けるのか？（後書き）

特に連絡はないです ｗ

あるとしたら・・・スランプまっしへらです ｗｗ

では次回もよろしくお願いします！では！

護衛対象は大和撫子！？

拓也視点

はア い前回に引き続き万屋たくちゃんだぜエ ・・・
さて、自分不器用なンで護衛対象にいきなり接触すンぜエ！

・・・はア ・・・
えーと・・・？近衛木乃香だっけかア？

・・・黒髪で、おつとりしていて、美人だつたけかア ・・・

・・・この場合どうしたらいいんだろうな ・・・
え？どうしたんだつて？見つかつたンだよ ・・・
めっちゃ早くになア ・・・
もオ、モチベーシヨン駄々下がりだわア ・・・
折角張り切つて探しに行こうつて言うときに見つかつたつてよオ ・・・
・

バツドタイミングだなア ・・・

取り敢えず、俺の顔は知ってるだろオし声かけるかア ・・・

拓也

「あー、テメエが近衛木乃香かア？」

木乃香

「うん、 もうやえー」

明日菜

「木乃香に何の用よッ！」

拓也

「其処のオレンジいるせH・・・
ちょっと最近物騒らじくて俺がボディガードを務める口トになつ
たから挨拶に来たんだよ」

明日菜

「はあ？ アンタ、 ボディガードにしたら体細すぎるのでしょ」

拓也

「オレンジよ・・・
体格で簡単に実力計つてる内は三下だぞオ？
コレでも結構強いしなア・・・主に万屋の仕事で色々してから
なア」

ちやんと超能力の口トは隠して言つたが・・・
鬱だア・・・このオレンジも一緒にいくとはよオ・・・

明日菜

「信用出来ないわね・・・」

拓也

「信用して貰わなくとも結構
テメエ達がクライアントじゃねエしなア・・・」

明日菜

「へいあんと？」

木乃香

「明日菜～、其れは顧客つて意味やよ～」

拓也

「・・・はア
・・・取り敢えず学園祭の間は一緒に回ることになるからな
あと、俺ンコトは袁川さんもしくは拓也さんでオッケーだから」

木乃香

「うん、わかつたで～

そういうえば拓也さんて学園祭の出し物の準備手伝つてなかつた
？」

明日菜

「そつ言えば・・・」

拓也

「ン？覚えてたのかア
居たぜエ・・・少しキレたりしたがなア・・・
覚えてンなら早エだろオ・・・
ユウナ・スプリングフィールド及びミサカの保護者役の袁川拓也
だア・・・
万屋をしてつから困つたことが有つたら言いなア・・・
缶コーヒーで手を打つてやるぜ～」

明日菜

「・・・格安ね」

木乃香

「わかつたえ～」

取り敢えず色々話しあって、どう風に動くのか決めた。・・・
あ、言つてたかア既に一日田なンだぜ～

明日菜

「まずは、普通に回るのよね？」

拓也

「普通ね～。・・・
テンプレ氣味だが、まずお化け屋敷でも行くかア？」

木乃香

「OKやで～」

-お化け屋敷-

依頼・・・近衛木乃香の護衛

- 条件 -

1 . 危険な目に遭わせるな

2 . はぐれるな

3 . 危険な目に遭った場合、近衛木乃香をまづ逃がす

4 . 最悪の場合記憶を消しても良い

いつやつともつ一回見ると物騒だよなア . . .

本当にまごつちまつぜ？流石の俺でもよオ . . .

- のつぺらぼうの場合 -

拓也

「 . . . ?

何故俺の腕を一人とも抱きしめてやがんだア？

明日菜

「い、良いじゃない！別に！」

木乃香

「ノリやで～」

「うひめしや～」

明日菜

「きやあああ！」

拓也

「うお！？」

ン？今何に驚いたかってエ？

・・・明日菜の抱きつきの威力にびびった・・・
腕の骨が逝かれるかと思つたぜエ・・・

木乃香

「大丈夫かえ～？明日菜～」

拓也

「俺の腕が大丈夫じゃない・・・」

明日菜

「・・・ベ、別に怖くなかったわよ。」

拓也

「なら、腕を放してくれ・・・折れる・・・」

「ここへやの場合」

拓也

「よひやくへ出口が見えたなア・・・」

「俺の腕が何回逝かれかけたか・・・
痛かったぜエ・・・全くよオ・・・」

明日菜

「やうね・・・」

木乃香

「おもしろかったわ～」

拓也

「へい、やい、行くわ」

明日菜

「あたしコレが終わつたらゆつべつ寝るんだ・・・」

拓也

「ひひよ、まさかの此処で死亡フラグかよオ」

・ピトツ・

明日菜

「キヤアアアアアア・・・」

拓也

「・・・」

・ペチペチ・

木乃香

「氣絶してもうたな〜」

拓也

「・・・此処のクオリティ半端無かつたししゃねヒよ

ただいま木乃香と明日菜の部屋だぜヒ

男子禁制なンだがなア・・・

おつと一田田が終わるがまだ田覚めてないコイツの為に一応一緒に
いとくかア

お、田を開けやがつたア

拓也

「よオ

明日菜

「何で私寝てたの？」

拓也

「気絶してたンだよ・・・」

木乃香

「明日菜おきたんか～」

拓也

「まあ、明日の為に早く寝るのが得策だぜ」H

明日菜

「そりね・・・おやすみ」

拓也

「・・・何で俺の膝の上で寝ンだよ・・・」

護衛対象は大和撫子！？（後書き）

次回一回目・・・

一体どうなるんでしょうか？ｗ

そういうえば自分、遊園地にいつたんですが

ぐるぐる回る回る～この感じがたまらない～って感じで回してると

コーヒー カップで気分が悪くなつた駄猫ですｗ

ぐるぐる回しそぎて死にそうになりましたｗｗ

次回もよろしくお願ひしますね・・・では！

最近の学校スゲエ・・・前編

拓也 視点

はアい前回、前々回に引き続き万屋たくぢやんだゼエ・・・
最近のロボットはスゲエなア・・・
空とぶンだゼエ？魔帆良つて

ぬらりひょん居るし、空にはロボットが居るし、科学力が何よりス
ゲエ

明日菜

「えーと昨日は『めんなさい』」

拓也

「いや、別に足痺れただぐれエだから大丈夫だ問題ないゼエ」

木乃香

「男なら足痺れたとかゆわんほつがいいでー」

拓也

「中学生に言わるとかオレ／（^○^）＼」

明日菜

「なんで両腕あげてるの？」

拓也

「・・・ほつといてくれ」

木乃香

「さわりとまうがええコトもあるねんで～明日菜～」

拓也 「電波は怖いぞオ・・・」

喫茶店

拓也

「さて・・・何喰つ?」

明日菜

「え? いいの?」

木乃香

「ありがとうな~」

拓也

「オレはコーヒーで」

明日菜

「な、なら紅茶で」

木乃香

「つちは緑茶で~」

拓也

「・・・あンのかア?」

マスター

「・・・あるよ」

三人

「・・・え・・・」

- ティータイム -

- 拓也 「さて、何処を回る？」
- 明日菜 「うちのクラスの知り合いがバスケの試合するって言ってた覚えが」
- 木乃香 「そう言えばゆーながゆつてたな～」
- 拓也 「なら其処に行くかア・・・マスター幾らだア？」
- マスター 「500円だ」
- 三人 「「「安ッ！？」」」

拓也

「・・・あれ? ゆーの方の一人たおれたえ! ?」

木乃香

「 3 0 0 3 ね ・ ・ ・ 」

明日菜

「 ハハで ・ ・ ・ おおやつ てるなア ・ ・ ・ 」

拓也

おいおい安いんだろオ ・ ・ ・
一体大丈夫なのかア?あの店はよオ ・ ・ ・
お気に入りにしようと思つてるから潰れて貰つちや こまるしなア ・ ・ ・
・
因みに今 ・ ・ ・ 体育館だぜ

「・・・ちょっと行ってくるわア・・・オレ・・・球技特意だしなア！」

明日菜

「アイツ・・・なんか子供みたいな屈託の無い笑顔だつたわね」

木乃香

「可愛かつたえ～」

拓也

「え～と其処のおせいせん・・・オレを君のチームにいれてくれね

・バスケットボール 試合・

エカア？」

裕奈
「え？え？」

拓也

「一人ケガしたンだろ？ いけるだろオ？」

裕奈

「う、うん・・・」

拓也

「よつしゃ～！ 久々にあそべるぜエー！」

裕奈

「・・・喜んで貰つてありがたいんだけどにゅ～・・・」

明日奈

「・・・25・0つて・・・」

木乃香

「すごいな～殆ど拓也さんやったやん・・・」

裕奈

「知り合いなんだにゃ・・・三人つて」

拓也

「ン・・・優奈とミサカと千雨とエヴァと茶々丸とも知り合いだ
ぜ」

明日奈

「確か親代わりと一緒にすんでるのよね?」

拓也

「ン・・・そオだぜ」

裕奈

「中々すごい友好関係だね～」

拓也

「自負してるぜエ・・・」

後編に続く

最近の学校スケュール 前編（後書き）

はい、久々にコツチです。w

とりあえず、一体どうなるんでしょうか？w

高校ツライぜ・・・全くよオ・・・

では次回もよろしくお願ひしますね・・・では！

最近の学校スケュ・・・中編

拓也視点

はアい前回、前々回、前々前回に引き続き万屋たぐちやんだぜエ・・・

やつとロシチ書きやがつたかア・・・
はア・・・遅すぎンだろ・・・メンドクセエ・・・
さて・・・前回はガラにもなく球技を本氣でやつていたンだが・・・
何か武道大会やるらしい・・・かめはめ 撃つ孫くんはいねエの
かなア・・・

一片やつてみたいゼエ・・・ベ、別にバトルジャンキーなんかじや
無いンだからね！

・・・やつぱ何回やつてもキモイモンはキメエな・・・
駄目だなア・・・でも入り方がツンデレ型じやねエとなんかしつく
りこねエ・・・

拓也

「はア・・・」

明日菜

「どうしたのよ？ため息なんかついて」

拓也

「いや・・・自分のあり方に疑問を抱いてなア・・・」

木乃香

「占いでもしたろか？？」

拓也

「遠慮させて貰うぜ」
「さて・・・俺は大会?天下一武道会?まあ、それに出ようと思つてなア」

明日菜

「・・・ああ・・・」

木乃香

「大丈夫なん?」

拓也

「あア・・・大丈夫なんだぜ」
「・・・」

明日菜

「なんか気抜けてるようだから・・・気つけなさいよ?」

拓也

「あア・・・」

拓也

「雑魚ばっかで疲れたア・・・」

・・・あれ? 描写されてねエ よオな・・・
またアレか? 駄猫の手抜きかア?・・・メンドクセエ ことしたのに
手抜きとか・・・

拓也

「・・・天下一武道会じゃねエ けど・・・強いのは居なかつたしな

ア・・・」

・・・睨まれてるなア・・・自分で言つちやつたとはいえ・・・
俺みたいなモヤシを睨むとは・・・暇人かア?あれ?言つてる意味
が分からねエ

取り敢えず・・・決勝だなア

「さて・・・第一回戦！哀川拓也対モブ太郎A！」

・・・名前エ・・・取り敢えずスルーでいくかア・・・

モブ太郎A

「君に勝つて名前を貰うんだ！」

拓也

「・・・名前ぐらいつけてやれよ・・・」

モブ太郎A

「取り敢えず逝くぞ！」

拓也

「字が違エ！-！」

-バキ-

司会者

「哀川選手の勝利です！」

拓也

「・・・何とも言えねエむなしさが広がるぜエ・・・」

司会者

「第一回戦——哀川拓也対津田タカトシ——」

・・・なんでやねン！

「マジなんでだよー・ビックリだぞオ！

タカトシ

「よおー！」

拓也

「なンで「ソ」だよー！」

タカトシ

「宣伝してこいつて会長が・・・」

拓也

「よくハハハまで残れたな・・・」

タカトシ

「駄猫さんのお陰だよ」

拓也

「なるほど」「都合主義か・・・」

タカトシ

「まあ、そつなるね」

拓也

「ンじや・・・宣伝しろ

そしたらあわきんドラムつて元の居場所に戻してやるから

タカトシ

「死んじゃうよ！」

拓也

「大丈夫だア・・・そこら辺は補正かけるだろオからな」

タカトシ

「チクショー！！桜才戦記よろしく！」

バキッ・・・パンパン・

拓也

「フウ・・・」

司会者

「・・・哀川さんの勝利です！」

意外に長くなるから・・・後編へ・・・

最近の学校スケュール・中編（後書き）

やつと更新できたが・・・なんという低クオリティ・・・
はあ・・・妹様・・・なんとか俺の少し時間をくれえええ

拓也視点

はアい前回、前々回、前々前回（「ヨリ引き続き万屋たくちやンだ
ゼエ・・・

残念なお知らせとしては・・・大会は特に面白イコトがなかつたら
カツトだア

黙猫的に言つと書いてる最中に妹が更新を押して全部バーになつて
考えられなくなつたことだな

アレは見てて痛々しい後ろ姿だつたゼエ・・・笑いがとまらねエ
さて、大会終わつてから後夜祭みたいなコトするみてエなンだが・・

・

拓也

「なア、ユウナア・・・なンで俺の腕をへし折りつしてンだア？」

ユウナ

「いや、私達とはいかねえのに明日菜達と歩いててむかつと来たと
かじやないから・・・

なあ？エヴァに千兩？」

エヴァ

「ああ、そだな・・・別に楽しみにしてたとかじやないから別に
いいんだけどな」

千兩

「やつだぜ？別にきこしてないからな？」

ミサカ

「そりですよ~と//ミサカは本心を隠しながら言います」

拓也

「つったつてよオ・・・仕事だったんだからしちゃがねエじやねエ
か」

ユウナ

「へえ・・・女子中学生と遊ぶのが仕事ねえ・・・?」

・ガチヤン・

真名

「お邪魔するよって・・・本当にお邪魔かい?」

刹那

「真名・・・やつぱり、後にしたほうが・・・」

拓也

「すまねエが、こいつ達に依頼のコトこいつてくれ・・・流石にこいつ
つ達ヶガさせたくねエし・・・」

刹那

「なんといつか・・・え~・・・まあお嬢様を護衛してくれてあり
がとうございました」

拓也

「ン・・・で缶バービーは?」

刹那

「え～これぐらいで良いですか？」

拓也

「ン・・・コレだけありや 一週間は保つなア」

真名・刹那

「・・・・」それで一週間？」「

ユウナ

「つち・・・本当に依頼だつたんだな」

拓也

「だから言つたじやねエか！依頼だつて何回もよオーー」

真名

「取り敢えず失礼するよ」

刹那

「お邪魔しました」

拓也

「氣イつけるよオ・・・今日疲れたしもオ寝る」

ユウナ

「あの～・・・」

拓也

「ンだよ？」

ユウナ

「後夜祭いかな」

拓也

「いかねエよ・・・武道会したり、バスケしたり、腕おられかけたり・・・」

もオ拓也さん的にHP5004ありや良い方だぜエ?」

ユウナ

「・・・（ウルウル）」

拓也

「ツグ・・・そんな目したって・・・」

ユウナ

「・・・（ウルウルウル）」

拓也

「あア! もオ分かったから! 行くから!」

ユウナ

「・・・（ツグ）」

千雨・エヴァ・ミサカ

「・・・（ツグ）」「・・・（ツグ）」

拓也

「テメエ達・・・」

ン？後夜祭は？つて其れはまた今度だ・・・番外編としてマジメに
作り出してやがるからなア
取り敢えず1年目はあと日常編を残すだけ・・・波乱の2年目は薬
味が来たり
クズの転生者が来たり、ちょっと英雄がお使いに来たり・・・え？
一つ変なの混じつたつて？
まあ、見逃してくれ・・・
ソコで、聞きたいことが数個あるンだが・・・一年目・・・
パワップロでいう成長期なンだが・・・大戦に行くか、魔帆良でgo
るかつてのが一個だ
ンで、もう一個は・・・

先生になつて良いのかア？数学の先生になるンだが・・・
適当に店（万屋）をだして適当に過ごすつてのもあるンだが・・・
なるとしたらアレだなア・・・超能力先生タクヤ！？て感じかア？
まア、なにもこねエなら好きにさせて貰うが・・・
期限は1年目の日常編ラストまでだア・・・よろしく頼むぜH

最近の学校スゲエ・・・後編（後書き）

てな訳で・・・割とマジメに悩んでます・・・
大戦行くか現代でgoるか、先生なるか万屋でgoるか
まあ、基本どっちでもいいんですけど・・・
ネギま！？を初めて見たのは大戦期なんですねww
中途半端に見て面白いと思って・・・
書き始めたんで・・・ナニも来なれば現代でgoって万屋でgo
ります

では！次回もよろしくおねがいしますね！

新キャラ登場でまさかの転生者ー!?

拓也視点

おお、どオも!良いコトして気分が良い哀川拓也だぜHー!
・・え?何をしたのかつて?

人助けだぜHー・・・変なおっさんから助けてきたぜH
えーと・・・名前が確かにア・・・時雨彩華だつた筈・・・
まア、いまいち名前は覚えてないンだが・・・
で、変な親父が絡みついて女性がイライラしてたから・・・
ン殴つたぜ!

3m位飛んだかなア?

さて、てな訳で・・・日常編スタートだア

拓也

「さて、ユウナよ・・・」

ユウナ

「何だ?」

拓也

「一緒に一狩りい」オゼー!」

ユウナ

「・・・どうした?いきなり・・・」

拓也

「いや、某二口動の女性実況者見ててやりたくなったンだぜH」

コウナ

「・・・まあ、いいや・・・何行く?」

拓也

「なら・・・ジョン行ひせH・・・的的な意味で」

彩華視点

あ、どうも。初めましてよね?時雨彩華よ
一応転生者やってるわ、最近一方通行に似た人に助けられてね
・・・転生者だとは思うんだけど、失礼だし聞かないわ
私の経緯を言うと

普通に病気で逝く へんてこな神にあう 生き返らせられる
で、能力が御坂美琴のレベル1だったわ
八年かけてレベル5迄なんとかあげたんだけど・・・
へんな神が今になつてなんか絡んできて・・・もの凄く触られて気
持ち悪かったのよ
そしたら最初に言つた一方通行に似ている人に助けて貰つたの
もの凄く格好良くみえたわ・・・まるで対一方通行戦そげぶだった
しね・・・

彩華

「どうしたんですの?、お姉様」

白

「どうしたんですの?、お姉様」

彩華

「 もうへ、たまらむわ・・・後、お礼書つてくわ

白

「 ・・・殿方に会つて行くのですね?お姉様・・・

彩華

「 ん?まあそりなんだけど・・・取り敢えず言つてくわ

拓也視点

拓也

「 ジジョン・・・

ユウナ

「 八回行つて一切やられなかつたな・・・

・ ピンピン・

拓也

「 出でくるなア」

ユウナ
「 おう」

・・・誰だろオカ・・・
まア、万屋に依頼だろオけどなア・・・

拓也

「はい、「チラ万屋・・・つて、あン時の娘かア・・・」

彩華

「わっさは有り難うございました」

拓也

「いやいや、別に気にしなくても良いぜ」

彩華

「それと・・・失礼ですが、転生者の方ですか?」

拓也

「・・・あア、そオだがア・・・もしかしてテメは?」

彩華

「ええ、まあどうりかと言えば転生させられた方が正しいですが」

拓也

「敵意はねエよオだし・・・ンで?」

彩華

「唯お礼に来ただけで・・・」

拓也

「・・・コウナーチョッち来やがれエー」

ユウナ
「ん？」

拓也

「早エなア・・・」

ユウナ

「いやいや、それほどでも」

彩華

「・・・転生者パラダイス？」

拓也

「間違いじやねエけど・・・うむ・・・まア、紹介しつくと
ユウナ・スプリングフィールドで俺側の奴」

彩華

「俺側つて？」

拓也

「あア・・・正義の魔法使い共に喧嘩ふっかけた」

彩華

「・・・え？」

拓也

「ンで、俺側がエヴァ一家、千雨、ユウナ、ミサカ、俺」

彩華

「・・・ミサカつて聞こえたような・・・」

拓也

「言つたがア？」

彩華

・・・次回に続く

新キャラ登場でまさかの転生者ー？（後書き）

てな訳で・・・次回です
では！

あ～・・・ファミチ 食いたいｂｙ黙猫（前書き）

てな訳で、どうも黙猫です

拓也

「ども、哀川拓也だア」

優奈

「ども、上条優奈だぞ」

ＴＰＰのアレ・・・やりはりましたなあ・・・

拓也

「へンのかね？夏川、冬川氷河期ってヤツ

さあ？僕が出来る」とついたらそんなこと成らないうちに願うだけだね

優奈

「最悪私たち消えるけどな・・・」

ンで、僕は最悪・・・ま、本当に僕ってば無力だね～
だけど、駄菓子菓子イ！連載云々は気にせず続けるぜい！

拓也

「・・・まあ、消えるか消えないかは流れに任せる以外ね～しなア

だね

拓也視点

はア・・・どオなンのかねエ？日本・・・
あ、どオも哀川拓也だ・・・TPPかア・・・はア・・・
メンドクセエ・・・最悪存在抹消かア・・・洒落なンねエ・・・
さて、まア・・・始めンゼエ・・・

彩華
「ハアハア・・・叫んで悪かつたわね・・・」

拓也
「驚かない方がアレだしな・・・」

彩華
「・・・え・・と・・・」

拓也

「つづウカ・・・口調崩れてンなア・・・」

彩華

「あ・・・」

拓也

「まア良いンだが・・・」

ユウナ

「んで、アナタは？」

彩華

「あ、私は時雨彩華、彩華って呼んで」

ユウナ

「なら、私はユウナで」

彩華

「分かったわ」

・・・簡単な自己紹介も終わったし・・・
さて、これからどうすつかねエ?

ユウナ

「彩華つてモンハン持つてるか?」

彩華

「え、ええ・・・でも急ね・・・」

ユウナ

「いや、ついさっきまで拓也とモンハンしてたき・・・
ジョンは唯の的だし、何か違うの行こうと思つたんだけよ・・・
二人だと時間かかるしな」

彩華

「今持つてゐからやろつかしら・・・」

拓也

「ならアマツカアルバ行くかア」

てな訳で、モンハシーンはカット！

拓也

「さて、やり終えたンだが・・・何故彩華はしななつかたのによオ・
・・

コウナサン・・・君・・・何故にこつたンだね？」

コウナ

「さて・・・なんなんでせうか？」

彩華

「ま、楽しめたんだからいいじゃない」

コウナ

「彩華あ・・・」

・ガシツ・

彩華

「あ・・・ヤバイ・・・可憐すぎるわ・・・」

拓也

「・・・まあいいか・・・」

- ガチャツ -

ミサカ

「ただいま。とミサカは帰つてきたことをアピールします」

拓也

「おウ、お帰り」

彩華

「お邪魔してゐるわね・・・ってアナタがミサカさん?」

ミサカ

「ええ、そうですが。とミサカは「トイシ誰なんだろ?」と頭をかしげながら返答します」

彩華

「(フチツ)初めてよ、拓也から話しが聞いたの、私は時雨彩華よ」

ミサカ

「ミサカはミサカ特別号です。とミサカは田の前にいるみ分ビッチに田口紹介します」

彩華

「(フチチーン)・・・アンタつてヤツはああああああー?ー?ー!?

拓也

「・・・今はミサカが悪いな・・・」

ユウナ

「・・・もの凄く激昂してるな・・・」サカは何であんなに挑発して・・・

「あー、なるほど・・・彩華も電気使いなんだ・・・しかも超電磁砲ときた・・・」

拓也

「さて・・・コウナ、逝つてここ」

ユウナ

「あいよ・・・氣は乗らねえけどな・・・」

・コウナの戦闘停止的そげぶ迄・・・カット・

彩華

「痛いわよ・・・コウナ・・・」

ミサカ

「痛いです。ミサカは殴られた所をさすりながら痛いことをアピールします」

拓也

「・・・じょうがねエだろ・・・」

ユウナ

「殴った私の手だって痛いんだぞ？」

彩華

「う～・・・」

拓也

「つぐ・・・」

ヤベエ・・・不覚にも萌えた・・・
アレだよな・・・美人がう～って狡いよな・・・マジで鼻から愛が
溢れそうになつたよオ

次回に続く・・・

あ～・・・ファミチ 食いたい b y 駄猫（後書き）

てなわけで、暇だあ・・・だから更新です w
取り敢えずまた次回です・・・では！

番外編 ゲームセンターＴＹ（前書き）

今日は戦闘少ないんで疑似戦闘です・・・
本編には全く関係無いです

番外編 ゲームセンターDX

拓也

「はい、ビオモオ哀川くん」と哀川拓也とオ

ユウナ

「上条さん」とユウナ・スプリングフィールドです

拓也

「取り敢えず、今回俺たちがするゲームは『チララ』」

ユウナ

「『』とある魔術の禁書目録』（とあるまじゅつのインデックス）は、鎌池和馬によるライトノベル『』とある魔術の禁書目録』を原作とするキャラクターゲーム

シードが開発し、アスキー・メディアワークス、角川ゲームスから2011年1月27日に発売、

販売された3D対戦型アクションゲームだ

拓也

「そんな訳で早速プレイをしたいと思つた」

ユウナ

「取り敢えず対戦をランダムのキャラクターでやるぞ

拓也

「因みに、俺は一方通行使い」

ユウナ

「

「私は当麻だぞ」

拓也

「取り敢えずセッティングまで、カット！」

黙猫

「ねえねえ、僕にもさせて・・・僕のなんだからだ〜！」

拓也

「・・・」

ユウナ

「・・・」

黙猫

「畜生！僕が何か悪いコトしたかコンチクショー！」

「・・・もういいよ、一人でモンハン3rdをブームランでやつてやる！」

拓也

「はい、セッティングも完了したんで、哀川オオオオン！」

ユウナ
「同じく」

・カチッ・・・・ウイイイイイイン・

拓也
「てな訳で、取り敢えず・・・つと」

ユウナ
「うし、先ず対戦だな」

拓也
「おウ」

ユウナ
「何がくるんだろうな?」

拓也・上条当麻・

ユウナ・一方通行・

拓也
「・・・なンつウカ変な感じなンだが・・・」

ユウナ

「・・・確かにな・・・」

拓也

「・・・取り敢えず、レツツパーティ！」

一方通行

『さつさと失せろオ』

当麻

『・・・最強・・・ツ』

打ち止め

『アナタが勝てますように・・・つてミサカはミサカは祈つてみる』

レディ・・・ゴー！

当麻

『オラア』

・キイン・

一方通行

『其処オ！』

・ズガガガ・

拓也

「うおオ！？ いきなり反射とかやつてらんねエよ

ユウナ

「いつもお前は無双してるけどな・・・」

一方通行

『あはア！』

当麻

『効かねエよ！』

・ピキイイン！ -

当麻

『オラア！』

・バキッ -

一方通行

『グフツ・・・』

当麻

『ヨツ・・・ハツ・・・トオ！』

・ガンガンガン -

一方通行

『グフツ・・・』

拓也

「よしよし、押すぜエ！！」

ユウナ

「ツチイ・・・最強の癖に使いづれえ・・・」

拓也

「そオカ？」

ユウナ

「つち・・・」

当麻

『ほりよー』

一方通行

『其k・・・グフツ』

禁書目録

『スファインクスウ！！』

一方通行

『オラア・・・アハア！！』

-ズドン-

当麻

『ガハア・・・』

一方通行

『コイツでビオだア！？ちよこまかと動きやがつて・・・』

当麻

『ハア、トオ！』

一方通行

『グフツ・・・』

当麻

『先ずは、その幻想をぶち壊す・・・ツ！』

-バキツ-

-K・O-

拓也

「よし、勝つたア」

ユウナ

「・・・ハア・・・」

拓也

「てな訳で、今回のゲームセンターは終了です・・・ではアー。」

ユウナ

「負けっ放しは主義じゃねえ・・・もつ一回だー。」

拓也

「アイアイ」

駄猫

「・・・よつしゃ、ブーメランでイビル倒せた・・・」

番外編 ゲームセンターＴＹ（後書き）

てな訳で、今日はショボイ番外です。何故かＰＶが16万超えたんでｗ

拓也

「・・・なア、あの後何回も対戦挑んでくんだが・・・」

知るが、俺は唯一人でブームランで頑張ってたんだもん

拓也

「・・・」

ユウナ

「早くきやがれ拓也ああああ！」

次回は明日かな？・・・では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2033u/>

哀川くんのネギま！？戦記

2011年11月20日11時31分発行